田原本町文化財 創金年報 2015年8 25



田原本町教育委員会

田原本町文化財調査年報 2015年8 25



例 言

- 1. 本書は、田原本町教育委員会が2015年度(平成27年度)に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。
- 2. 埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。
- 3. 本書は、Iを清水琢哉・柴田将幹・西岡成晃、IIを藤田三郎・柴田・西岡・東藤隆浩、IIを東藤、Ⅳ.1を丸山真史(東海大学)・藤田、Ⅳ.2を小林和貴・鈴木三男(東北大学植物園)・佐々木由香(株式会社パレオ・ラボ)・能城修一(森林総合研究所)が執筆した。I.2の遺物は清水・柴田・江浦至希子・村島由樹・森嶌美穂が実測し、清水・柴田・西岡・江浦がトレースをおこなった。本書は西岡が編集した。

目 次

I. 田原本町の埋蔵文化財
1. 町内における開発
(1) 町内における開発と発掘調査
2. 埋蔵文化財の調査
(1) 発掘調査の概要
1. 唐古・鍵遺跡 第116次調査 4
2. 唐古・鍵遺跡 第117次調査12
3. 唐古・鍵遺跡 第118次調査14
4. 保津・宮古遺跡 第42次調査23
5. 保津・宮古遺跡 第43次調査28
6. 宮古北遺跡 第19次調査31
7. 宮古北遺跡 第20次調査35
8. 寺内町遺跡 第16次調査40
9. 多地区古墳推定地隣接地の発掘調査46
10. 三笠遺跡 第 1 次調査49
11. 阪手北遺跡 第7次調査
12. 唐古・鍵遺跡 試掘調査 (S-201501)
(2) 工事立会の概要
1. 佐味垣内遺跡 工事立会
Ⅱ.資料の整理と活用・普及
1. 文化財資料の整理・保管
(1) 埋蔵文化財の整理・保管61
(2) 木製品の樹種同定と保存処理63
(3) 図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化68
(4) 図書の受領69
2. 遺跡・文化財の保護
(1) 県指定文化財
(2) 町指定文化財77
3. 講座79
4. 学校教育等への支援
(1) 小学校出前授業80
(2) 中学校職場体験学習81
(3) 大学の学外授業81

(4) 講師	5の派遣82
5. 刊行物-	一覧83
6. 資料の液	活用
(1) 資料	lの貸出84
(2) 写真	4.掲載・撮影
(3) 資料	 調査・88
7. ボラン	ティア組織
(1) 唐古	「・鍵遺跡の保存と活用を支援する会 ······88
(2) 唐古	r・鍵遺跡史跡公園ボランティア88
Ⅲ 唐古・鎌	考古学ミュージアム
1. 常設展	
	・ 『本ギャラリー 今回の逸品93
2. 企画展	
	全企画展「たわらもと2015発掘速報展」94
	全企画展「弥生遺産Ⅲ~唐古・鍵遺跡の石器~」97
	展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」100
	-展示「綱にかける想い〜田原本町大字矢部の「綱掛」〜」101
	・ホームページ
(1) 入館	言者数102
(2) 夏季	►節電対策無料入館·······104
(3) 入館	言者アンケート105
(4) 視察	· 研修・学校等からの来館105
(5) ホー	- ムページ106
4. ボラン	ティア
(1) ボラ	・ ・ンティアガイドの実績·······106
(2) 企画	『展受付ボランティア·······106
IV. 資料の報	告
	'' 鍵遺跡における弥生時代前期の魚類遺存体(丸山真史・藤田三郎)109
	鍵遺跡から出土した編組製品等の素材の植物種
	1貴・鈴木三男・佐々木由香・能城修一) 117





1. 町内における開発

(1) 町内における開発と発掘調査

本町における2015年度(平成27年度)の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届(第93条)は44 件、地方公共団体等による通知(第94条)は14件で、計58件を数える。

本年度の発掘調査は11件である。内訳は、個人住宅等の建築2件、公共事業4件、民間開発5件 である。

本年度は、総調査面積に対する出土遺物数が、1 ㎡あたり約0.19箱と近年では高い比率を示して いる。これは、唐古・鍵遺跡第116次調査および第118次調査の2件で、合わせて200箱の出土量が あったためである。特に第116次調査は弥生居住域のため出土量が多い。

第1表 田原本町における2015年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93 条	発掘通知 94 条		発掘調査	工事 立会	慎重 工事	先行 工事
4.4	1.4	通知内容	14	36	9	0
44	14	実施分	町 11 県 0	41	-	-

※通知から実施までに年度をまたぐ場合がある為、件数は一致しない

第2表 田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

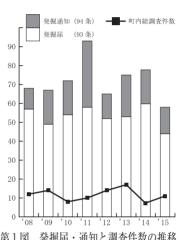
		'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15
発掘届(93条)		57	49	54	58	52	53	60	44
発掘通知(94条)		11	18	18	35	13	22	17	14
計		68	67	72	93	65	75	77	58
発掘	町	11	13	7	10	14	17	6	11
件数	県	1	1	1	0	0	0	0	0
町内総調査件数		12	14	8	10	14	17	6	11

第3表 町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

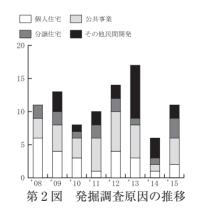
		'08	'09	'10	'11	12	'13	'14	'15
範囲確認		0	0	0	0	0	0	0	0
個人	住宅	6	4	2	1	4	3	1	2
公共	公共事業		4	3	5	6	5	1	4
民間	分譲	2	2	1	2	2	1	1	3
開発	その他	0	3	1	2	2	8	3	2
計		11	13	7	10	14	17	6	11

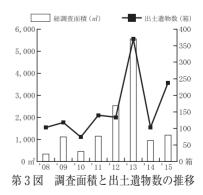
第4表 町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

	'08	'09	10	'11	12	'13	'14	'15
総調査面積(m²)	341	1, 117	457	1, 152	2, 530	5, 555	929	1, 199
出土遺物数(箱)	103	118	74	140	134	370	103	238



第1図 発掘届・通知と調査件数の推移



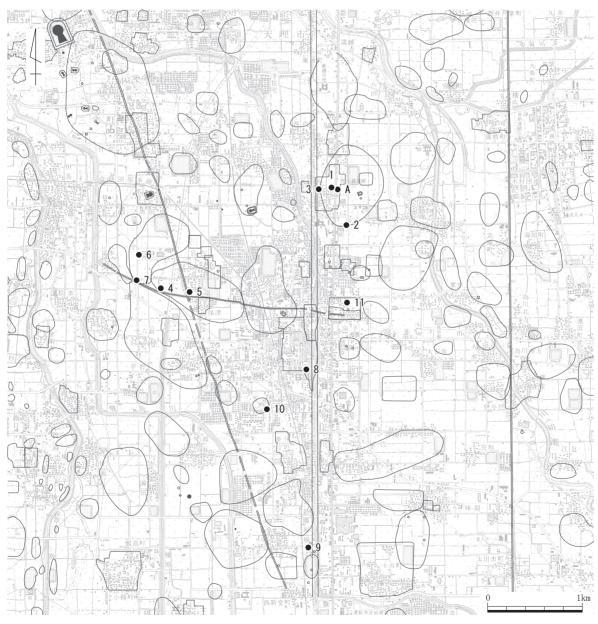


2. 埋蔵文化財の調査

(1) 発掘調査の概要

本年度は11件の発掘調査を実施した。弥生時代~古墳時代では、唐古・鍵遺跡、保津・宮古遺跡、宮古北遺跡等で成果が得られた。唐古・鍵遺跡第116次調査では弥生時代中期の井戸・大溝等を検出し、同第118次調査では遺跡西部を巡る環濠を検出した。保津・宮古遺跡第42次調査では、弥生期の方形周溝墓1基を検出した。

中近世では、唐古・鍵遺跡、宮古北遺跡、寺内町遺跡等で成果が得られた。唐古・鍵遺跡第116・118次調査では、唐古南氏の居館に関わるとみられる遺構を多数検出し、田原本町の中世遺構では初検出となる石組み井戸を各1基ずつ確認した。宮古北遺跡第20次調査では、保津・阪手道の側溝の可能性がある溝を検出した。



第4図 田原本町の遺跡と調査地点 (S=1/40,000)

第5表 2015年度 発掘調査一覧表

			調査地	原因者	原 因	期間	面積	担当	備考	
	遺跡名	次数	検 出 ;	遺構		出	土遺	物	遺物量(箱)	
			田原本町大字鍵小字垣内311番1	個人	宅地分譲	2015. 7. 2 ~ 9. 7	190 m²	清水琢哉 柴田将幹 西岡成晃	受託事業	
1	唐古・鍵	第116次	弥 生 時 代 前 期:大溝 1 条 弥生時代中期初頭:土坑 7 基、溝 2 条 弥 生 時 代 中 期:掘立柱建物 1 棟、井戸 5 弥生時代後期末:土坑 1 基 中 世:井戸 1 基、土坑 2 基、大 近 世:秦掘小溝群		穴6基、溝3条	弥生土器、 瓦質土器、 瓦、埴輪、	輸入磁器、	中世陶器、	139箱	
	唐士 ##	ΔΣ1177√r	田原本町大字鍵小字北登戸田51番外 北側道路	田原本町長	下水道工事	2015. 11. 17 ~11. 19	7 m²	清水・柴田	下水道課	
2	唐古・鍵	第117次	近世以前?:溝1条、河跡?1条 近 世:溝1条			土師器、瓦等	等		1箱	
			田原本町大字鍵小字垣内 381番1・395番2・396番	(株)ティーズ コーポレーション	宅地分譲	2016. 1.12 ~ 3. 9	480 m²	清水・柴田 ・西岡	受託事業	
3	唐古・鍵	第118次	弥生時代中期:大溝2条、溝1条弥生時代後期:大溝7条中世:土坑2基、井戸1基、大溝3近世:土坑12基、大溝1条、素掘小			弥生土器、 瓦質土器、 近世陶磁器、 金属器、銭貨	输入磁器、 瓦、木製	中世陶器、 品、石器、	61箱	
			田原本町大字宮古小字南吉田4番1	個人	賃貸住宅の建築	2015. 5.13 ~ 6. 2	90 m²	清水・柴田 ・西岡	受託事業	
4	保津· 宮古	第42次	 弥生時代:方形周溝墓1基 古墳時代:溝1条 古 代:建物群 中 世:素掘小溝群 弥生土器、土師器、須恵器等					恵器等	12箱	
_	保津・	the conf	田原本町大字宮古小字フヤ西25番1・2	個人	個人住宅の建築	2016. 2.16 • 17	9 m²	清水	国庫補助事業	
5	宮古	第43次	近世:大溝1条、小溝2条				土師器、瓦器、近世陶磁器、瓦、 木製品等			
6	宮古北	第19次	田原本町大字宮古小字倉田395番1	ならコープ	タンク設置工事	2015. 9.10 ~15	44 m²	清水・柴田 ・西岡	受託事業	
ь	日口化	弗19次	弥生時代:土坑2基、溝1条、小溝2条 古墳時代:土坑3基、小穴2基、溝1条			弥生土器、	上師器等		1箱	
			田原本町大字宮古小字祭田 170番5・171番4・172番7	田原本町長	道路拡張工事	2015. 11. 30 ~12. 25	140 m²	清水・柴田 ・西岡	建設課	
7	宮古北	第20次	古墳時代前期~中期: 土坑2基、小欠2基、 古 墳 時 代 後 期: 河跡1条 古 代: 大溝2条 中 世: 土坑2基、小溝2条	大溝1条、河跡2	条	弥生土器、 黒色土器、 [±]			15箱	
			田原本町小字南町442番・443番	田原本町長	道路拡張工事	2015. 10. 28 ~11. 6	44 m²	清水・柴田 ・西岡	建設課	
8	寺内町	第16次	平安時代末?:素掘小溝群 鎌 倉 時 代:溝12条、小穴11基 近 代:講堂?基礎						5箱	
9	多地区古墳	推定地	田原本町大字多小字南八反田345番 北側道路外	田原本町長	下水道工事	2016. 11. 12 ~11. 16	13 m²	清水・柴田	下水道課	
	隣接地		中世?: 小溝10条			土師器、須渡	恵器、瓦質	土器等	1箱	
1.0	→ Aufe	Act a vi-	田原本町大字三笠小字ソマ田264番1	個人	個人住宅の建築	2015. 12. 22	7 m²	清水	国庫補助事業	
10	三笠	第1次	中世:小溝2条			輸入磁器、	EL .		1箱	
11	阪手北	第7次	田原本町大字阪手小字林昭209番1	支希住宅㈱	宅地分譲	2016. 3. 7 ~ 3.16	175 m²	柴田	受託事業	
11	秋于北	男/ (八	中・近世:素掘小溝群 時期不明:河跡1条			土師器、須原 中世陶器、〕		土器、	1箱	

第6表 2015年度 試掘調査一覧表

	遺跡名	調査地	原因者	原 因	期間	面 積 担 当	備考
	退跡石	検 出	遺構		出	土 遺 物	遺物量(箱)
Γ.	唐古・鍵遺跡	田原本町大字鐽小字垣内308番3	田原本町長	史跡公園整備ほか	2015. 5.19	3.6m² 清水琢哉	総合政策課
A	S-201501	なし			なし		0箱

1. 唐古・鍵遺跡 第116次調査

1. 遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地の中央、標高約47m前後の沖積地に立地する、弥生時代を代表する環 濠集落のひとつである。これまでの調査成果から、唐古・鍵遺跡の集落内部は、大きく北・南・西・中 央の4地区に区分できることが明らかになっている。第116次調査は西地区中央部に位置する。平成 27年度に宅地造成が計画され、共有道路となる部分について発掘調査を実施した。調査地の東側に 第11・82次調査地があり、本調査地においても、弥生時代前期の集落遺構などが検出されることが 想定された。

2. 調査の成果

(1) 層序

I:暗褐色土 [検出標高48.2m、以下数値のみ記す]、II:暗青褐色土 [48.1m]、II':橙褐色土 [48.0m]、II:茶灰色土 [47.9m]、IV:灰褐色土 [47.8m]、V:黄褐色細砂 [47.5m]、VI:黒色粘土 [47.4m]、VI:淡青灰色シルト (微砂質) [47.3m]、WI:淡青灰色シルト (粘質) [47.2m]

第Ⅰ層は水田耕土層、第Ⅱ層は水田床土層、第Ⅳ層は中世遺物包含層、第Ⅴ層以下は地山となる。 中世の遺構、弥生時代の遺構はともに第Ⅳ層上面で検出した。

(2) 遺構と遺物

弥生時代前期

本調査地で検出した弥生時代前期の遺構は大溝1条のみであったが、東に隣接する第82次調査地では当該期の遺構が多数検出されており、弥生時代前期から居住区であったことが明らかとなっている。

SD-201 調査区を縦断する大溝で、その一部を調査した。後世の遺構により大半が壊されており、その推定幅は4.2m、深さは0.8m以上である。出土土器の時期は、大和第 I-2様式である。第74次調査区で検出された SD-201の堆積土、時期、規模、方向が共通することから、同一遺構の可能性が高い。

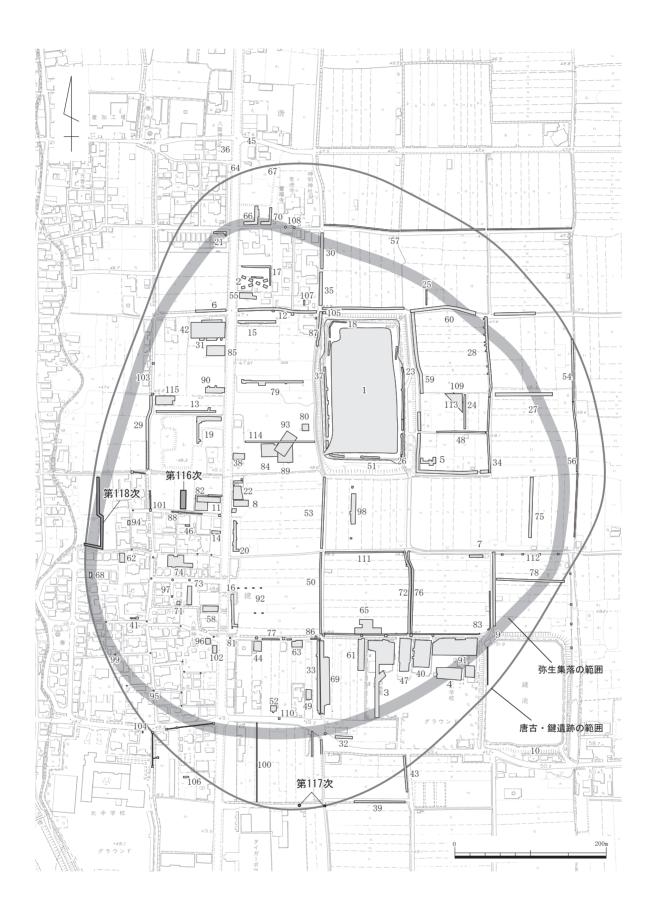
弥生時代中期

SD-151・152 調査区の西側で検出した溝で、SD-201の最終堆積の可能性も考えられる。 これらの 2 条の溝の時期は大和第II-1 様式である。

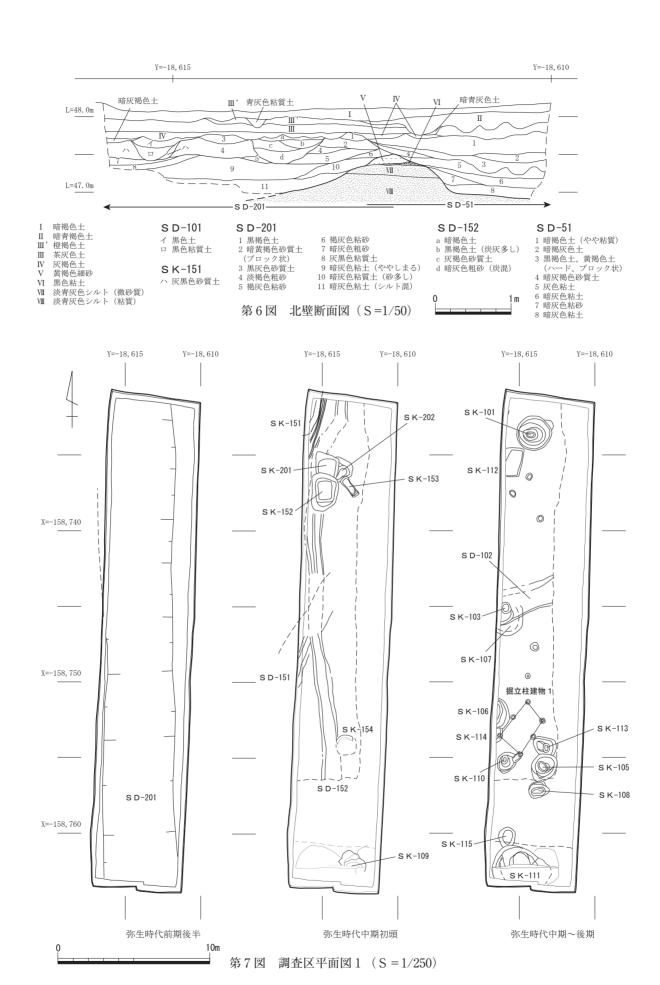
SK-201 調査区北側で検出した土坑で、SD-152を切る。南北1.3m、東西1.5m、深さ0.8m の方形である。この土坑からは、太型蛤刃石斧や結晶片岩製の石庖丁が出土した。この土坑の性格 は不明である。出土した遺物は第10図に示した。 $1 \sim 3$ は広口壷である。時期は大和第 $\Pi - 1$ 様式である。

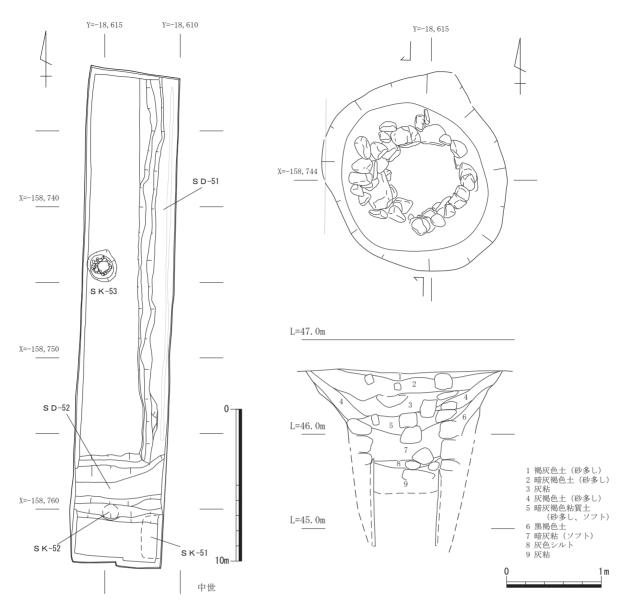
SK-101 調査区北側で検出した土坑である。直径は2.3m、深さ1.6mである。上層は籾を含む 炭灰層であった。SK-101からは、甕(第11図-1)、高坏(第11図 $-2\cdot3$)、台付鉢(第11図-4)が出土した。時期は大和第W-1様式である。

SK-105 調査区南側で検出した井戸で、直径1.5m、深さ1.6mである。底から、口縁部の一部



第5図 調査地位置図 (S=1/5,000)





第8図 調査区平面図2 (S=1/250)

第9図 SK-53 平面図および断面図 (S=1/40)

と脚台部が欠損した水差形土器(第11図 – 5)、鉢(第11図 – 6)が出土した。時期は大和第 \blacksquare – 4様式である。

掘立柱建物 1 調査区中央やや南寄りで検出した、桁行 2 間、梁間 1 間の掘立柱建物である。建物の長軸は北東 - 南西である。遺物の出土量が僅少であったため、時期は特定できないが、SD - 152上で柱穴を検出したことから、弥生時代中期以降の遺構と考えられる。

弥生時代後期末

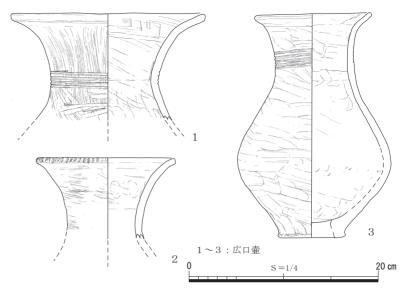
SK-111 調査区南端で検出した土坑である。北半分を調査(南半は調査区外)し、上層で庄 内期の完形の小形甕(第11図 - 8・9)が出土した。

中世

SD-51・52 調査区東側を縦断する大溝(SD-51)に、調査区南側の東西方向の大溝(SD-52)が取りつき、逆「L」字形を呈する。SD-51から出土した遺物を第12図に、SD-52から

出土した遺物を第13図に示した。

第12図 - 1 ~ 3 は土師器 皿、4・5 は土師器の坏、6 ~10は土師器の羽釜である。 第12図 - 11は瓦質の片口壷、 12は瓦質の鉢である。第12図 - 13は陶器である。橙赤褐色 の胎土に灰釉が施釉されている。美濃産と推定される。第 12図 - 14・15は、青花碗である。両者とも中国福建省から の輸入磁器とみられる。14の



第10図 SK-201 出土土器

外面には灰が付着している。また、15の破面には漆が付着しており、破損した後に漆で接着して使用していたと考えられる。このほか、多数の桃核、漆器椀や下駄も出土している。第13図 $-1 \sim 5$ は土師器皿、 $6 \sim 8$ は土師器の羽釜、9は瓦質の羽釜である。

これらの遺物から、 $SD-51\cdot 52$ は16世紀頃に同時に開口していたと考えられる。既往の調査で検出された中世大溝は、 $14\cdot 15$ 世紀と16世紀の大きく2時期に分けることができ、今回の調査の検出例は後者にあたる。

SK-53 調査区中央西側で検出した石組み井戸である(第9図)。長軸2.1m、短軸1.8m、深さ2m以上である。井戸の石組みの上段は井戸内に崩落しており、機能時に石が何段積まれていたのかは不明だが、部分的に5段の石が残存していた。さらに、石積みの下は八角柱状に組み合わせた板材を井戸枠としていた。このことから、井戸下部は板組、上部は石組の構造と考えられる。最終埋没時には、土器も投棄されており、SK-53の下限は16世紀頃と考えられる。

近世

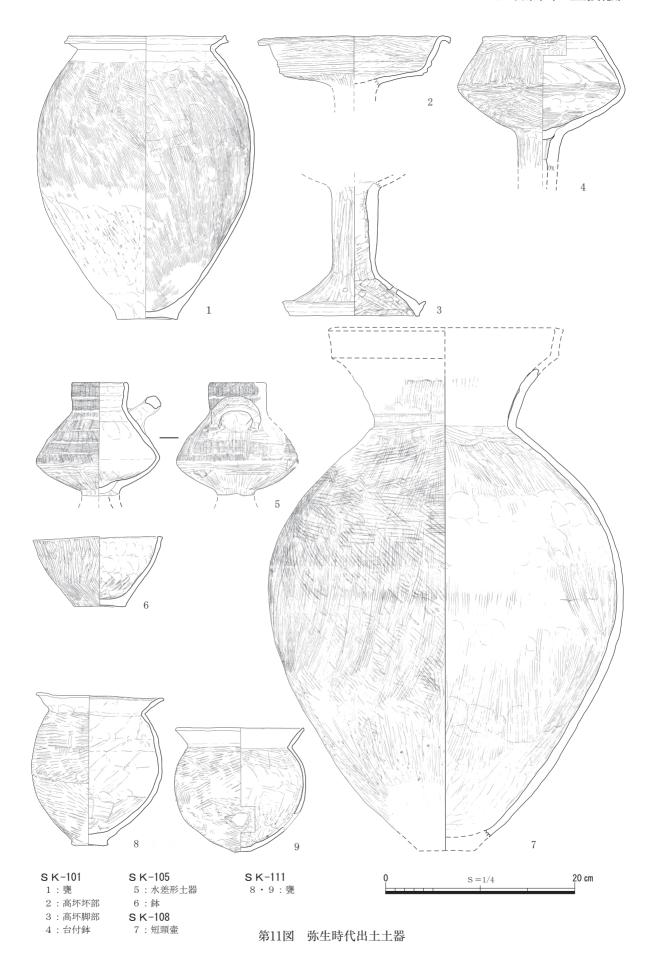
素掘小溝群 調査区全体で、主として南北方向の小溝群を検出した。

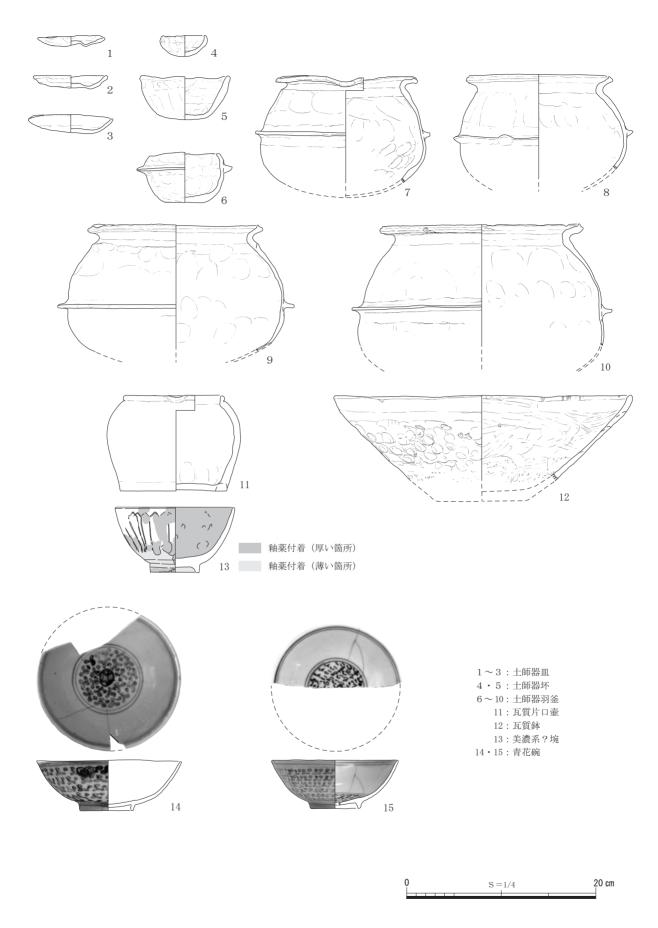
4. まとめ

弥生時代前期後半から中期初頭にかけて、大溝が調査区を縦断していた。この溝は、第74次調査区で検出されたSD-201と接続する可能性が考えられ、接続するならば、大溝の延長は南北軸で75m以上におよぶ。唐古・鍵遺跡では南北軸に合う大溝はこれまでに検出されておらず、今後、どのような性格の溝になるのかを検討する必要がある。

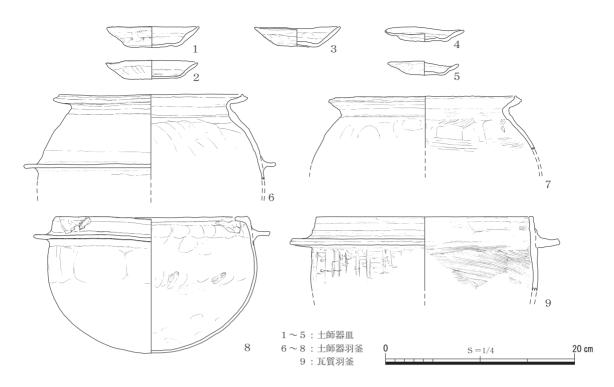
弥生時代中期以降は、掘立柱建物のほか井戸などが確認できることから、居住区であったと考えられる。このことから、居住域の西限が第82次調査地(弥生時代前期)から第116次調査地(弥生時代中期以降)へと拡大したと推定できる。

中世(16世紀頃)の逆「L」字形の大溝は、唐古南氏に関係する遺構の可能性が高い。また、調 香区中央西側で検出された中世の石組み井戸は、田原本町内で初の検出例となった。





第12図 SD-51 出土遺物



第13図 SD-52 出土遺物



写真1-1 SK-201 遺物出土状況 (南から)



写真1-2 中世大溝完掘状況(南から)



写真1-3 SK-53 完掘状況 (西から)



写真 1 - 4 SD-51·52 出土土器

2. 唐古・鍵遺跡 第117次調査

1. 既調査の概要

今回の調査地は、遺跡南端に位置する。下水道工事に伴う調査で、付近では第100次調査で飛鳥時代の河跡等を確認しているものの、弥生時代関連の遺構は確認していない。今回の調査により、飛鳥時代頃の河跡の拡がりと周辺地形についての情報が得られることが期待された。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は道路である。人坑2ヶ所について発掘調査を実施したが、東側の第1トレンチは 全体が近世以前の大溝内であったため、第2トレンチの層序を基本層序として示す。

I:アスファルト〔検出標高48.9m、以下数値のみ記す〕、II:暗青褐色砂礫土(改良土)〔48.8m〕、II: 黄褐色粗砂〔48.6m〕、IV:暗青褐色粘質土〔48.55m〕、V:暗青灰色粘土〔48.45m〕、VI:青褐色粘質土〔48.25m〕、VI:暗灰褐色砂質土〔48.2m〕、VII: 橙褐色粘質土〔48.1m〕

第Ⅰ~Ⅲ層は現代の道路開発に伴う造成層、第Ⅳ層は旧耕土、第Ⅲ層は時期不詳の洪水堆積層、 第Ⅲ層以下が地山である。近世の遺構は第Ⅲ層上面で、古代頃の遺構は第Ⅲ層上面で検出した。

(2)遺構と遺物

古代?

SD-2051 第2トレンチで検出した北北西-南南東方向の溝である。幅0.9m、深さ0.1mを測る。 堆積土は粗砂質で、顕著な遺物は出土していない。遺構の時期と性格は不明。ただし、近接する第100次調査で確認した飛鳥時代の河跡と一連の遺構である可能性がある。

SD-1051 第1トレンチ全体が南北方向の溝である。調査区は遺構の東肩付近に相当する。溝幅不明、深さ0.9m。堆積土の大半は粗砂である。顕著な遺物が出土していないため、時期と性格は明らかでない。

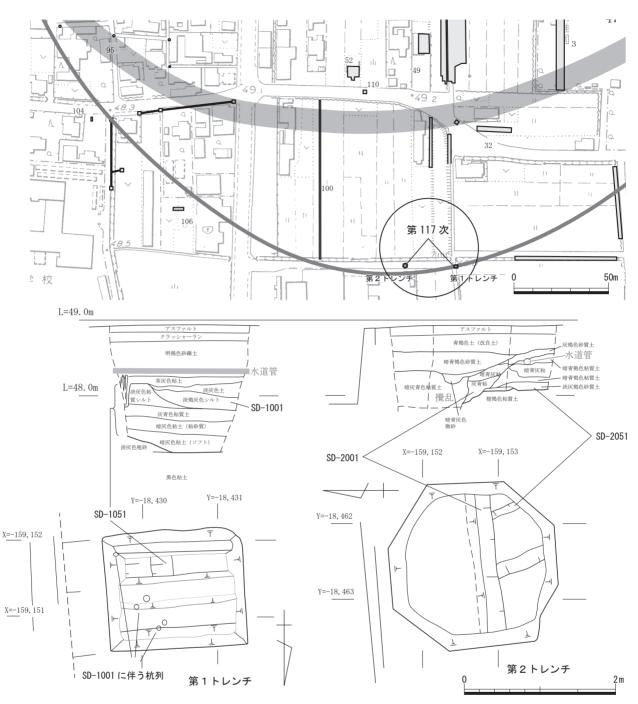
近世~近代

SD-1001 第1トレンチで検出した溝跡である。南北方向とみられるが、東西方向溝との交差点に相当する可能性がある。深さ0.4mを測る。この遺構に伴う杭列は北北西 - 南南東方向に並ぶ。近世~近代の遺物が出土した。

SD-2001 第2トレンチで検出した東西方向の溝である。北半が過去の水路工事で攪乱を受けていたため、溝幅と深さは明らかでない。堆積土などから近世の遺構とみられる。

3. まとめ

今回の調査では、近世の溝跡、古代頃の可能性がある溝または河跡などを確認した。一方、弥生 集落としての唐古・鍵遺跡関連の遺構・遺物は確認できなかった。



第14図 調査地位置図および遺構平面図・断面図 (上: S=1/2,000、下: S=1/50)



写真 2-1 第1トレンチ全景(北から)



写真 2-2 第2トレンチ全景 (西から)

3. 唐古・鍵遺跡 第118次調査

1. 既調査の概要

今回、遺跡西端で宅地分譲が計画され、道路となる部分について調査区を設けて発掘調査を実施した。調査区は、若干蛇行する逆L字形で、延長140m、幅4mの480㎡を測る。過去の調査成果から、弥生時代の環濠帯が拡がることが予想された。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は宅地である。最近まで水田であったが、調査着手の半年前に造成がおこなわれた。 I:淡黄褐色砂礫土〔検出標高47.4m、以下数値のみ記す〕、II:暗青褐色土〔47.0m〕、II:青褐色土〔46.85m〕、IV:暗茶灰色土〔46.75m〕、V:橙褐色土(ハード)〔46.6m〕、VI:淡黄灰色粘土(シルト質)〔46.45m〕、VI:淡黄灰色シルト〔46.3m〕、VII:黒色粘土〔46.1m〕、IX:青灰色シルト〔45.9m〕

第Ⅰ層が現代造成土、第Ⅱ層は旧水田耕土、第Ⅳ層は近世遺物包含層、第Ⅴ層が地山の可能性をもつ橙褐色土である。弥生時代中期~中世の遺構はこの第V層上面を検出面とする。

(2)遺構と遺物

弥生時代

SD-101 調査区北端で検出した北東 - 南西方向の大溝である。近世の粘土採掘坑に切られ、 東壁などに断片的に残存するのみである。このため、遺構の規模と時期詳細は不明。

SD-102 調査区北半で検出した北東 - 南西方向の大溝である。幅9 m、深さ1.2mを測る。堆積土は淡褐色粗砂が中心で、蛇行気味であることから流水の激しい遺構の可能性もある。調査区南西端で検出したSD-106とは規模と堆積土から同一遺構となる可能性が高い。遺物は、中層から弥

生時代後期の長頸壷片などが少量出土した。

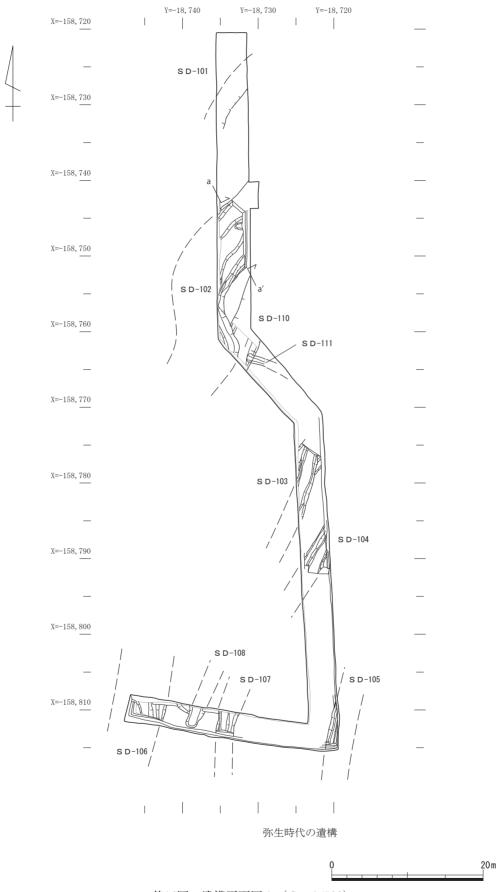
SD-103 調査区中央で検出した北東-南西方向の大溝である。幅3.8m、深さ1mを 測る。遺物は僅少であるが、下層からほぼ完 形の長頸壷1点が出土した。弥生時代後期の 遺構と考えられる。

SD-104 SD-103の南側で検出した北東-南西方向の大溝である。幅2.8m、深さ0.9 mを測る。SD-103とは幅3mの間隔を空け、並行に掘削されている。なお、遺構の南半は中世大溝に切られる。遺物は、甕片などが少量出土している。弥生時代後期の遺構と考えられる。

SD-105 調査区南東端で検出した北北



第15図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第16図 遺構平面図1 (S=1/500)

東-南南西方向の大溝である。西肩のみの検出であるが、深さ0.8mを測る。弥生時代後期頃の遺構とみられる。

SD-106 調査区南西端で検出した南北方向の大溝である。調査区外に拡がるため幅不明、深さ 1 m を測る。堆積土は SD-102 と同様の粗砂であり、両者は同一遺構となる可能性が高い。遺物は僅少で、本遺構のみでの時期決定は困難であるが、 SD-102 との関係から弥生時代後期の遺構と考えられる。

SD-107 調査区南部で検出した南北方向の大溝である。幅2.5m、深さ0.8mを測る。遺物は弥生土器小片が少量出土したのみであり、詳細な時期は明らかでない。堆積土と遺構の位置から、SD-104と同一の遺構である可能性がある。

SD-108 調査区南部でSD-107の西側に隣接して検出した北北東 - 南南西方向の大溝である。 溝幅2m、深さ0.4mを測る。調査区南端で収束しており、環濠の端部となる可能性がある。位置関係から、SD-103と同一の遺構である可能性がある。

SD-110 調査区中央、SD-102南肩付近で検出した、北北西-南南東方向の大溝である。幅 4.5m、深さ1m。SD-102に切られる。遺物は、弥生時代中期頃の土器片が少量出土した。

中世

小溝群 調査区中央を中心に、東西方向・南北方向の小溝を多数検出した。調査区中央北付近の 溝から半完形の瓦器境 2 点などが出土しており、遺物から13世紀前後の耕作に伴う小溝群と考えら れる。

SD-64 調査区中央で検出した、東西方向の大溝である。幅5m、深さ0.8mを測る。遺物は少ないが、中世末~近世初頭頃の土師質土器等が出土した。

SD-70 調査区中央南で検出した東西方向の大溝である。幅2.4m、深さ1mを測る。土師皿等の16世紀頃の土器が出土した。後述するSD-70Bを北肩寄りで再掘削したものと考えられる。

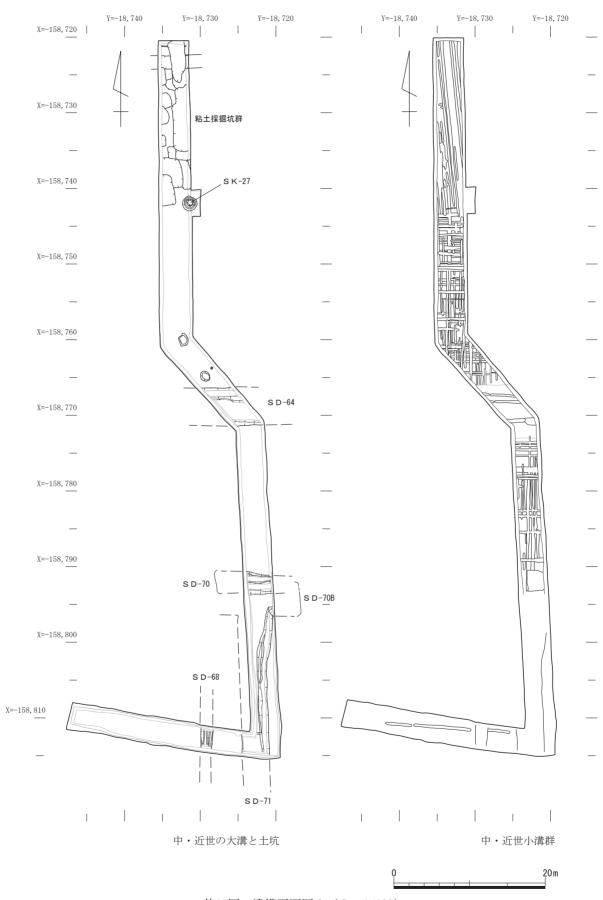
SD-70B SD-71と同時期に開口していたとみられる東西方向の大溝である。北肩がSD-70に切られるため詳細な遺構の規模は不明。14世紀前後の遺構であろう。

SD-71 調査区南側で検出した南北方向の大溝である。幅3.8m、深さ1.2mを測る。SD-70BとはT字形に合流する。なお、SD-70Bとの分岐点から南へ2.5mの地点で杭列を確認した。堰のような構造物とみられる。土師皿・瓦器埦等の14世紀頃の土器、曲物容器底板等の木製品が出土した。

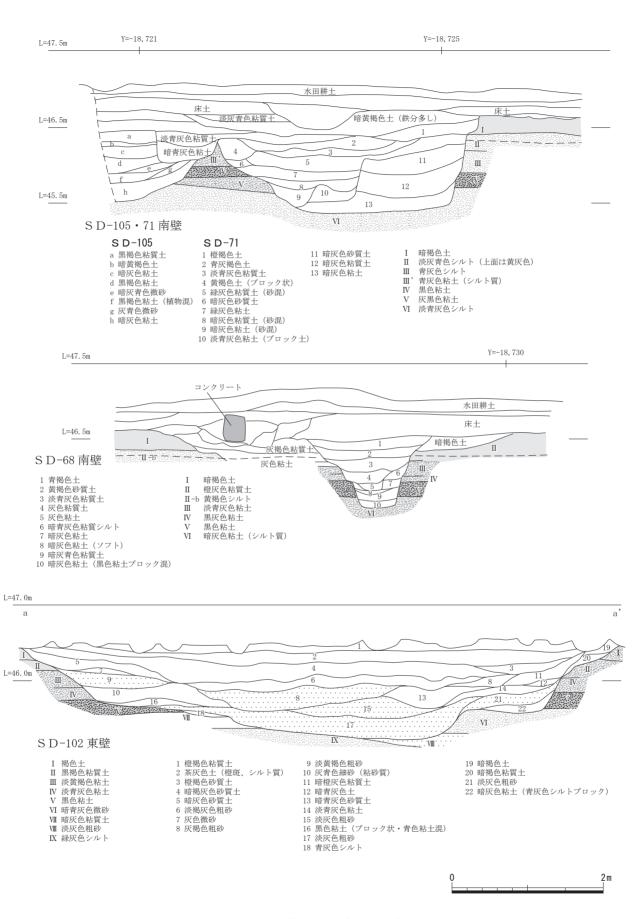
SK-27 調査区北半で検出した円形の井戸である。直径2m、深さ1.7mを測る。4段構造で、 上段は3段の石組み、中段上位は直径66cm・高さ48cmの桶、中段下位は直径52cm・高さ42cmの桶、 下段は直径50cm・高さ40cmの曲物容器が井戸枠として設置されていた。上段の埋土から大型の羽釜 1点などが出土した。14世紀前後の遺構と考えられる。

近世・近代

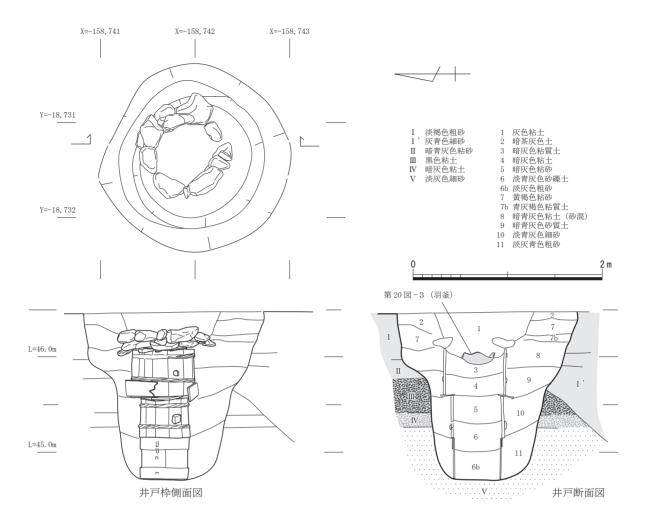
粘土採掘坑 調査区北部で近世頃の土坑群を検出した。調査区北端から南に25mまでの範囲で12 基を確認した。1辺2m前後の隅丸方形のもの、南北8m、幅3m前後の不整形のものなどがあり、 それぞれ深さは1m前後を測る。調査地の近くには、戦時中まで今里で瓦業を営んでいた石田家が あり、近世には瓦師平七の屋号で近隣の寺社に瓦を供給していた。今回検出した土坑群は、瓦生産 に伴う粘土の採掘がおこなわれた跡と考えられる。出土遺物は僅少であったが、若干の近世陶磁器



第17図 遺構平面図2 (S=1/500)



第18図 遺構断面図 (S=1/50)



第19図 SK-27平面図および断面図 (S=1/40)

を含むことから、近世頃の遺構と考えられる。

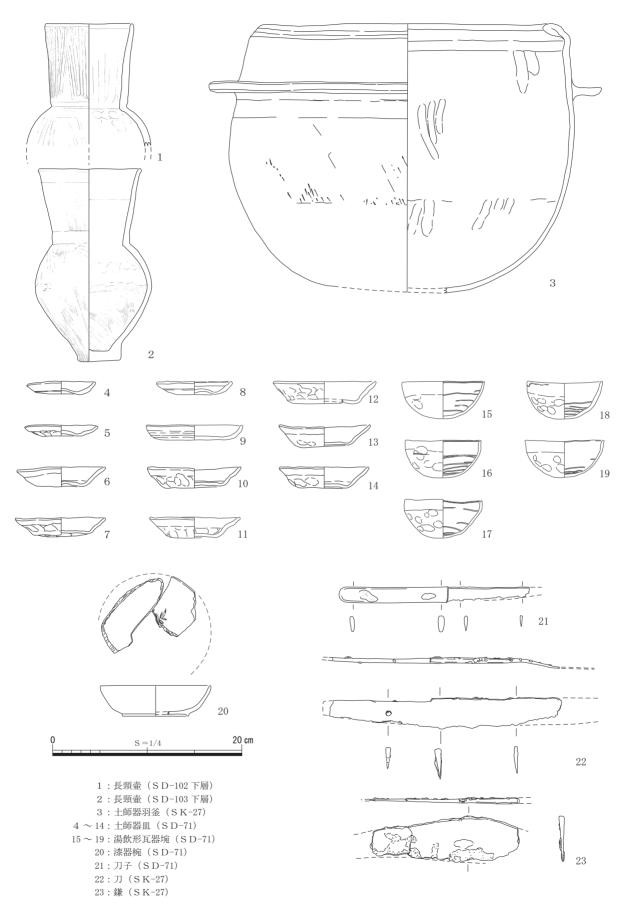
小溝群 調査区北部の粘土採掘坑の上面で小溝群を検出した。いずれも北北西 – 南南東方向で、中世の小溝群と主軸が異なる。近代頃の耕作に伴う遺構とみられる。

3. 出土した遺物

第20図 - 1 は、SD - 102下層から出土した長頸壷である。胴部下半が欠損する。大和第VI - 2 様式頃の遺物とみられる。 2 は、SD - 103下層から出土した長頸壷である。ほぼ完形。大和第VI - 3 様式頃の遺物とみられる。

3 は、井戸 S K -27から出土した土師質羽釜である。器高28.4cm、口径29.6cmの大形品である。14世紀頃の遺物とみられる。 $4\sim19$ は、S D -71から出土した土師器・瓦器である。 $4\sim14$ は土師器小皿、 $15\sim19$ は湯飲形瓦器埦である。20は S D -71から出土した漆器椀である。内外面は黒漆仕上げ、見込みに赤漆で植物を描く。14世紀頃の遺物とみられる。

21は S D -71から出土した刀子、22・23は S K -27から出土した刀・鎌である。21の柄は銅製で、僅かに金箔状の付着物が残る。



第20図 出土遺物



写真3-1 調査地航空写真(左が北)



写真3-2 SD-102 完掘状況 (南から)



写真3-3 環濠群完掘状況(西から)

4. まとめ

今回の調査では、弥生時代中・後期、中世、近世の各時期の遺構を検出した。弥生時代の遺構としては、唐古・鍵ムラの環濠と推定される弥生時代後期の北東 – 南西方向の大溝 5 条、中期の北北東 – 南南西方向の大溝 1 条を検出した。なお、SD – 102は粗砂堆積で規模が大きく、蛇行していることから、粘土堆積のSD – 103~105と様相が大きく異なる。周辺の調査成果を含め、弥生時代後期の環濠のありかたについて検討する必要がある。

中世の遺構としては、14世紀の唐古南氏居館跡に関わるとみられる大溝と、上段が石組の井戸1 基を検出した。居館の構造を考える上で大きな成果と考えられる。

近世の遺構としては、調査区北端付近で多数の粘土採掘坑を検出した。瓦製作のための粘土採掘がこの地域で盛んにおこなわれたことが明らかとなった。



写真4-1 SD-64 完掘状況 (南から)



写真4-2 SD-70 完掘状況 (西から)



写真4-3 近世土坑群(北から)



写真4-4 SK-27 石組みの敷板検出状況 (西から)



写真4-5 SK-27 一段目検出状況(西から)



写真 4 - 6 SK-27 完掘状況 (東から)

4. 保津・宮古遺跡 第42次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。これまで41次にわたる発掘調査を実施しており、縄文時代~中世の複合遺跡であることが確認されている。特に、奈良盆地低地部としては僅少な縄文時代後期の集落遺跡を検出していることは特筆される。また、弥生時代前期前半に遡る集落遺構を確認しており、中期・後期の集落遺構が点在することも判明している。さらに、北西に隣接する宮古北遺跡とは一連となる形で古墳時代集落の遺構が点在し、特に宮古北遺跡では方形プランの区画溝をもつ集落が存在するとみられる。

古墳時代中・後期にも遺跡各所で土坑・溝を確認しているほか、飛鳥〜奈良時代の建物群もみつかっており、大王の直轄地である「倭屯倉」の管理に関わる重要な遺跡である可能性も考えられる。今回の調査は、遺跡南西部での賃貸住宅建築に先だって実施した。建物の基礎による影響は柱状改良による5%未満ではあったが、重要遺跡として認定された遺跡での工事であるため、建築予定地内の一部に18×5mの調査区を設定して調査をおこなった。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は畑で、最近までビニールハウスでの作物栽培をおこなっていた。

I:暗青褐色土〔検出標高45.8m、以下数値のみ記す〕、II:暗青褐色土〔45.65m〕、II:暗橙褐色土〔45.5m〕、IV:暗灰褐色土〔45.4m〕、V:暗褐色土〔45.35m〕、VI:黒褐色土〔45.2m〕、IV:灰褐色粗砂〔45.2m〕、WI:黄灰色砂質土〔45.2m〕、IX:黒褐色土(粘砂質)〔45.15m〕

調査では、古代~中世の遺構を第VI層上面で検出し、弥生時代~古墳時代の遺構を第VI層上面で確認した。なお、調査区南西部は時期不明の河跡による影響を受け、暗灰褐色粗砂層上面が古代~中世の遺構検出面となっていた。

(2)遺構と遺物

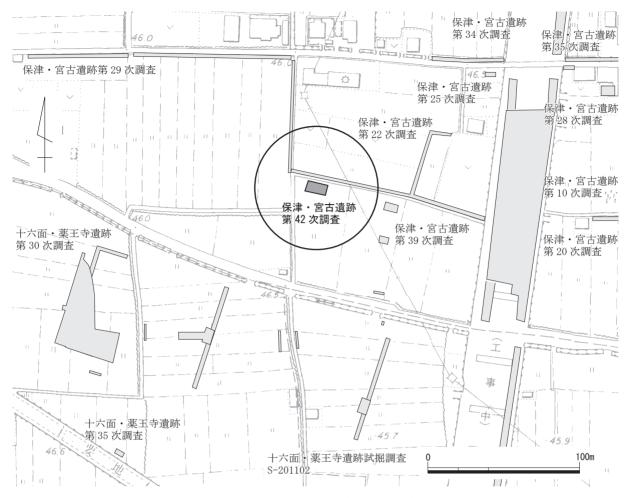
弥生時代~古墳時代

SD-101 調査地東半で検出した溝である。幅1.6~2.0m、深さ0.4mを測る。南半は南南東 − 北 北西方向であるが、北半は東北東方向に屈曲する。方形周溝墓の北西コーナー部である可能性が高 い。遺物は、弥生時代後期後半の壷・甕等が出土した。

SD-103 調査区西半で検出した溝状遺構である。幅1.5m前後、深さ0.1m前後を測る。遺物が 僅少であるため詳細な時期は不明。須恵器等を含むことから、古墳時代後期の遺構と考えられる。

古代・中世

建物群 調査区全体で多数の柱穴を検出した。1辺0.4~0.6m、深さ0.3m前後の方形プランの柱穴が多いが、一部直径0.3m前後の楕円形プランのものもみられる。柱穴が錯綜しているため明確な建物プランは不明であるが、複数棟の建物が何度か建て替えられながら存続していた可能性がある。なお、柱穴から出土した土器が僅少であるため詳細な時期は不明であるが、基本的には奈良~平安時代頃の遺構と考えられる。



第21図 調査地位置図 (S=1/2,500)

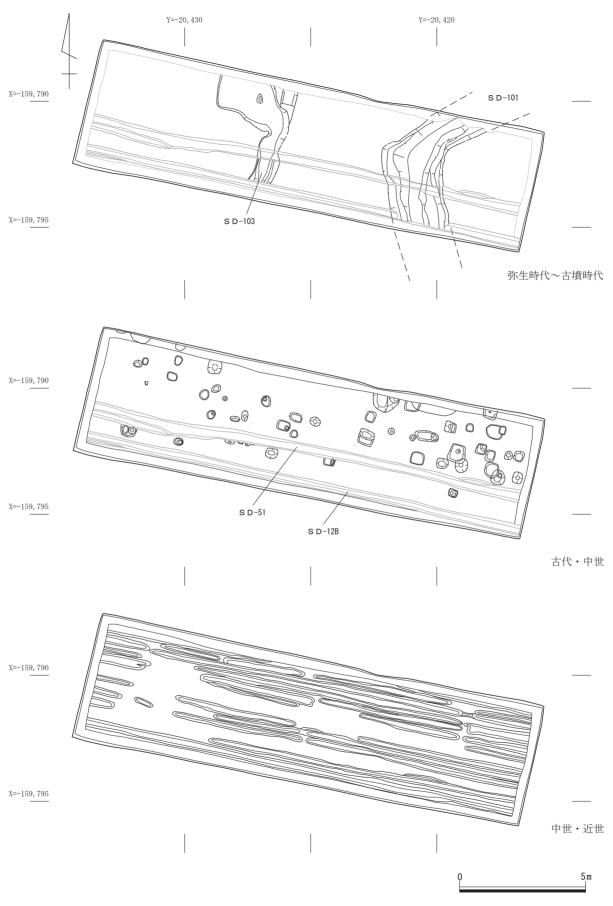
SD-51 調査区南側で検出した、東南東 - 西北西方向の小溝である。幅0.4m、深さ0.3mを測る。鎌倉時代頃の瓦器片が出土していることから、鎌倉時代前後の遺構と考えられる。素掘小溝群を構成する1条ともみられるが、他の溝と比較して深いことから、屋敷地の区画を目的とした遺構である可能性も考えられる。また、南側1mに平行して掘削されたSD-12Bもほぼ同時期の遺構とみられる。

小溝群 調査区全体で東南東 − 西北西方向の小溝多数を確認した。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を 測る。中世〜近世の耕作に伴う小溝であると考えられる。

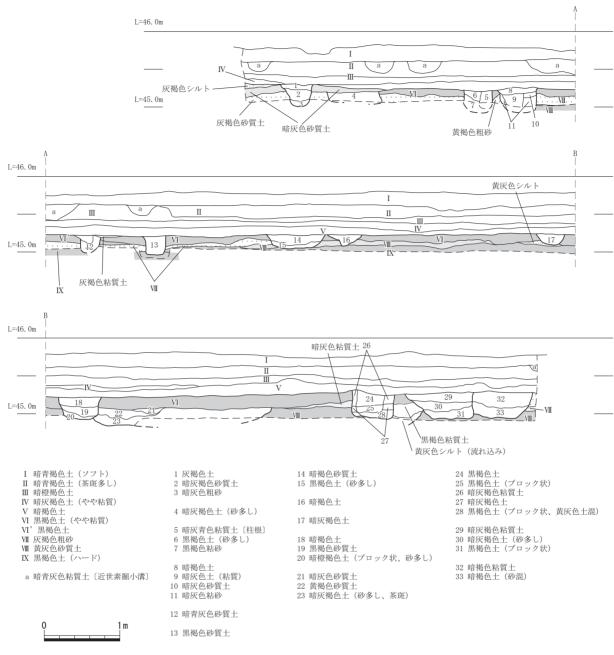
3. まとめ

今回の調査では、保津・宮古遺跡の弥生時代後期頃の墓域についての情報を得ることができた。 また、古代の建物群が拡がること、中世には耕地となっていたことを確認することができた。

弥生時代後期の方形周溝墓は、出土した土器群から後期後半頃の遺構とみられる。点在気味に拡 がる集落域に対し、比較的近接した位置に墓域が形成されていたことが判明した。



第22図 調査区平面図 (S=1/150)

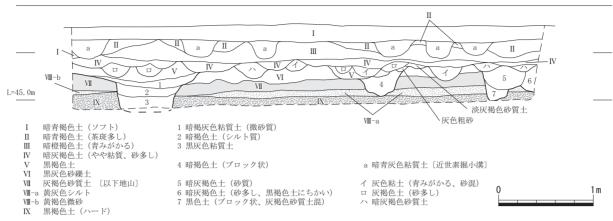


第23図 北壁断面図 (S=1/50)

古代の建物群は、北側に隣接する第22次調査でも数棟分の建物跡を確認していることから、今回 の調査でも多数検出されることが予想されていた。調査により、想定通り建物群の拡がることを確 認することができたが、詳細な時期と建物プランについては調査面積の制約もあり確定することが できなかった。

鎌倉時代頃には比較的深い小溝2条が掘削されていた。これらの遺構の性格は不明であるが、屋敷地の区画溝である可能性もあり、また耕地に伴う溝である可能性もある。今後の検討が必要と考えられる。

L=46.0m



第24図 調査区東壁断面図 (S = 1/40)



写真 5 - 1 古代遺構完掘状況 (東から)



写真5-2 弥生時代遺構完掘状況 (東から)



写真 5-3 SD-101 完掘状況 (北西から)



写真5-4 SD-103 完掘状況 (北から)

5. 保津・宮古遺跡 第43次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。縄文時代後期・弥生時代~古墳時代後期の集落跡、古代の官衙推定地、中世の集落跡などからなる複合遺跡である。特に、北北西 - 南南東方向に遺跡を縦断する筋違道(太子道)、西北西 - 東南東方向に遺跡を横断する保津・阪手道が遺跡中央で交差する古代交通の要衝であり、古代の遺構が田原本町としては比較的濃密に分布する地区である。

今回の調査は、個人住宅の建築に伴って建物予定部分の南側隣接地に東西6.6m、南北1.5mの調査 区を設定して実施した。筋違道の東側に隣接することから、東側側溝が検出できる可能性が考えられていた。

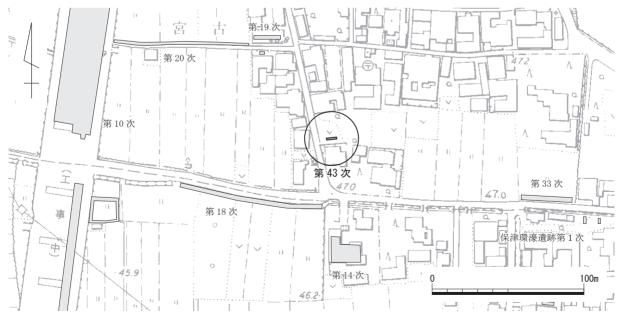
2. 調査の成果

(1) 層序

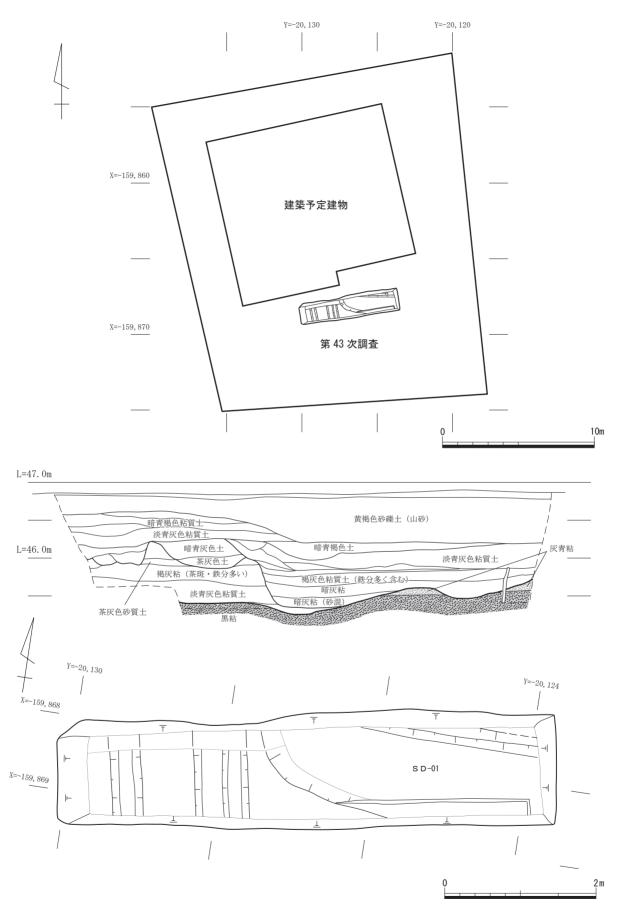
調査地は宅地である。過去の造成により0.2m前後の客土層が形成されていた。なお、調査区東半は近世大溝の部分が一段低かったものとみられ、客土層が0.6mとなっている。ここでは、調査区西半の層序を示す。

I:暗褐色土 [検出標高46.85m、以下数値のみ記す]、II:黄褐色砂礫土 [46.8m]、II:暗青褐色 粘質土 [46.6m]、IV:淡青灰色粘質土 [46.4m]、V:茶灰色土 [46.2m]、VI:茶灰色砂質土 [46.0 m]、VII:褐灰色粘土 [45.9m]、WI:淡青灰色粘質土 [45.7m]、IX:黒色粘土 [45.4 m]

第 $\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$ 層が造成土で、調査区東半では第 $\mathbb{I} \cdot \mathbb{I}$ 層が認められず、第 \mathbb{I} 層の厚さが0.6m前後となっていた。第 \mathbb{V} 層上面が近世末~近代の遺構面、第 \mathbb{V} 層上面が近世で直機で掘削し、以下を人力で調査した。



第25図 調査地位置図 (S=1/2,500)



第26図 調査区位置図および調査区平面図・断面図(上:S=1/250、下:S=1/50)

(2) 遺構と遺物

近世

SD-01B 調査区全体が東西方向の大溝内であった。深さ0.9m前後を測るが、幅は明らかでない。北壁で層序のみ確認した。遺物には近世陶磁器が含まれることから、18世紀後半以降の遺構であると考えられる。

近代

素掘小溝群 SD-01Bの埋没後に掘削された南北方向の小溝を 2 条を調査区西半で検出した。 SD-01Bの埋没後、一時耕地となっていたものと考えられる。 なお、この小溝は後述する SD-01 に切られる。

SD-01 推定幅2 m前後、深さ0.9m前後の東西方向の大溝である。SD-01Bの東半を再掘削し、調査区中央で北側へ屈曲する。近世末~近代の陶磁器が出土した。また、小形の曲物容器1点が下層から出土した。遺物より、近代を中心に開口していた遺構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、屋敷地を区画していたと考えられる近世大溝を検出した。近世には東西方向の 大溝であったものが、近代にはL字形に屈曲するプランに代わったとみられる。また、遺構の切り 合い関係から、一時耕地となっていた可能性も考えられる。

なお、今回の調査により筋違道の東側側溝が確認できる可能性を考えていたが、調査区全体が近世大溝内であったため確認することはできなかった。今後の調査により改めて確認を進めていく必要がある。



写真6-1 完掘状況 (東から)



写真6-2 完掘状況(西から)

6. 宮古北遺跡 第19次調査

1. 遺跡・既調査の概要

宮古北遺跡は、田原本町のほぼ中央に位置する、古墳時代前期と古代を中心とする集落遺跡である。第19次調査地の東に位置する第1次調査(保津・宮古遺跡第3次調査)は、ならコープの本体建物の建築工事に伴って実施され、弥生時代の河跡が検出されたほか、古墳時代の居館跡と推定される方形の大溝の一部が検出されている。また、本調査地の南に位置する第9次調査では、北北西-南南東方向の時期不明の溝(SD-101)が検出されているほか、南西に位置する第15次調査では、朱の精製片口鉢が出土した。

第19次調査は、ならコープの敷地内で、防火水槽の設置に伴って実施した。第1次調査で検出された弥生時代の河跡が検出されることが想定された。

2. 調査の成果

(1) 層序

I:アスファルト [検出標高47.5m、以下数値のみ記す]、II:クラッシャーラン [47.3m]、II:客 土 [47.2m]、IV:灰色粗砂 [46.2m]、V:青灰褐色粘 [46.2m]、VI:灰色粘質土 [45.8m]、II: 灰褐色粘質土 [45.7m]、III: 黄褐色粘質土 [45.6m]、IX:黄灰色土 [45.5m]

第Ⅰ~Ⅳ層は、ならコープの敷地内の舗装などに伴う層で、第Ⅳ層以下は地山となる。遺構検出は第Ⅳ層上面でおこなった。

(2)遺構と遺物

弥生時代前期

SD-201 幅0.6m、深さ0.6mの溝で、ほぼ北北西 - 南南東方向に伸びる。断面形は方形で、上端はやや開く漏斗状である。堆積は大きく2層に分けることができ、上層は黒褐色粘質土、下層はブロック土を含む褐色粘土層であった。

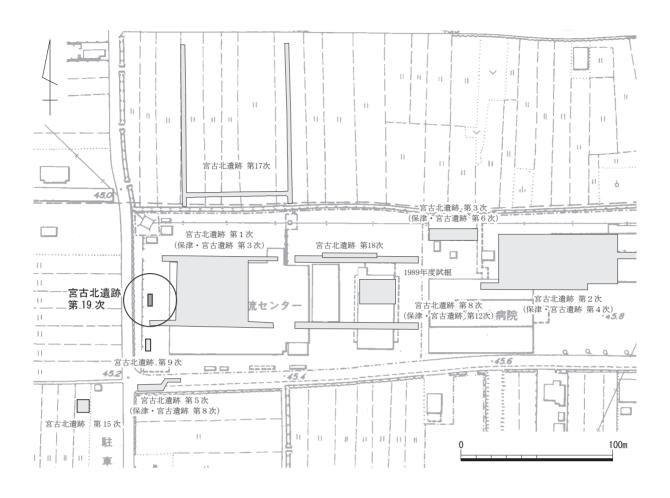
第9次調査で検出されたSD-101も同様の形状である。このことから、第9次調査SD-101と同一の遺構の可能性がある。SD-201の出土遺物は僅少だったが、大和第I-2様式土器の小片が出土していることから、弥生時代前期の遺構と判断できる。

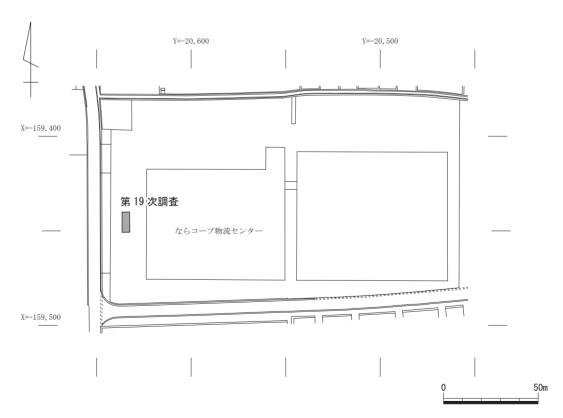
SK-201 調査区南西隅付近で検出した、径2.7m、深さ0.2mの土坑である。遺物の出土はなかったため、時期の特定はできないが、堆積土が黒褐色粘質土で、SD-201と同一であることから、弥生時代前期の遺構であると判断した。

古墳時代前期

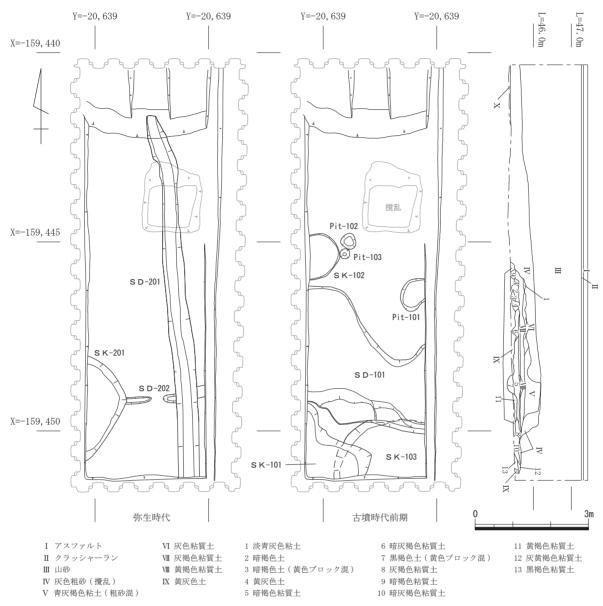
SD-101 調査区の南部で検出した、幅2.2m、深さ0.15mの西北西 - 東南東方向の浅い大溝である。北肩付近から、全体の約1/4が残存した布留2式の甕が出土した(第29図・写真7-1)。

SK-101 調査区の南西隅で検出した土坑である。長軸2.2m、短軸1.2m、深さ0.15mで、遺構の南西半は調査区外である。遺物は、長原式併行の凸帯文土器の胴部凸帯部分片が1片出土しているのみである。庄内~布留1式と考えられるSK-103を切っていることから、この土器片は混入と判断でき、遺構の時期は古墳時代前期頃と推定できる。





第27図 調査地位置図 (上: S = 1/2,500、下: S = 1/2,000)



第28図 遺構平面図および東壁断面図 (S=1/100)

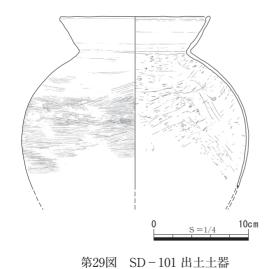
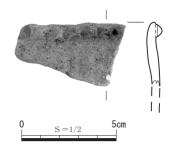




写真7 SD-101 遺物出土状況(西から)

SK-103 調査区南東隅で検出した土坑である。SD-101・SK-101に切られているため、本来の規模は不明だが、長軸2.4m、短軸1.5m、深さ0.3mを検出した。堆積土は暗褐色粘質土である。遺物は、庄内~布留1式の土器が出土したほか、長原式併行の凸帯文深鉢の口縁部片(第30図)が出土している。時期は、遺構の切り合いや出土遺物から、庄内~布留1式と考えられる。



第30図 SK-103 出土深鉢

3. まとめ

第19次調査地は遺物量も少なく、また、遺構密度も低い地点であった。しかし、前述のとおり、 東に隣接する第1次調査地点では、古墳時代前期の大溝が検出されており、第19次調査地点は、こ の大溝の中に位置する。第19次調査で検出された古墳時代前期の遺構が、居館の中でどのような位 置づけが可能なのかを検討する必要がある。

また、第19次調査地では第1次調査で検出された弥生時代後期の河跡は検出されなかった。このことから、第1次調査地の河跡は、第19次調査地の北側を流れると推定される。



写真8-1 弥生時代完掘状況(南から)



写真8-2 古墳遺構時代完掘状況(南から)

7. 宮古北遺跡 第20次調査

1. 既調査の概要

第20次調査地は、宮古北遺跡の南端に位置し、道路の拡幅工事に伴って発掘調査を実施した。北に隣接する第13次調査地では、調査区の東側で古墳時代の落ち込みが検出されている。また、南に隣接する十六面·薬王寺遺跡第31次調査では、古墳時代の集落跡や玉造関連資料が検出されており、第20次調査では古墳時代集落の拡がりを確認することが目的のひとつとなった。また、本調査地は保津・阪手道の延長にも該当しており、保津・阪手道の側溝の検出も期待された。

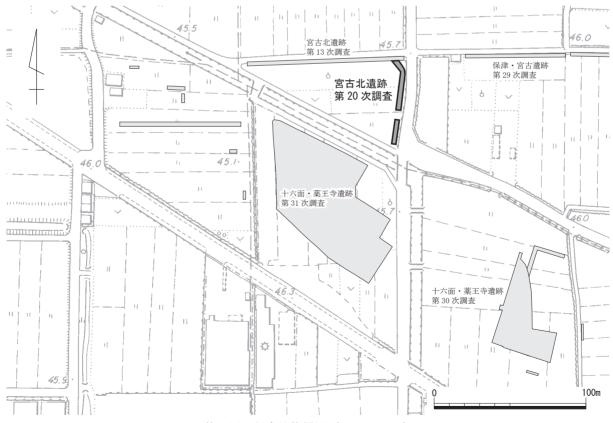
2. 調査の成果

本調査は、道路の拡幅に伴い、擁壁工事が実施される部分に調査区を設定した。ただし、調査地の敷地中央やや南よりの部分で工事車両の進入口を確保するため、調査区は2つとなった。北側を第1トレンチ、南側を第2トレンチと呼称する。

(1) 層序

I:客土〔検出標高45.3m、以下数値のみ記す〕、II:灰色土〔45.1m〕、II:淡灰褐色粘質土〔44.9m〕、IV:暗褐色土〔44.7m〕、V:灰橙色粘質土〔44.5m〕、VI:黄褐色粘質土〔43.9m〕、VI:緑灰粘〔43.8m〕

調査地は水田の堆積(第Ⅱ層:耕土、第Ⅲ層:床土)の上に客土(第Ⅰ層)が盛土されていた。 第Ⅵ層以下は地山となる。古代の遺構検出は第Ⅳ層上面でおこなった。



第31図 調査地位置図 (S=1/2.500)

(2) 遺構と遺物

a. 第1トレンチ

古墳時代前期~中期

SR-1102 第1トレンチの南半で検出した北西 - 南東方向の河跡で、幅5 m以上、深さ1.1mである。第34図に示した石製円板および滑石製の臼玉が出土しているほか、古墳時代前期~中期の土器も出土している。

古墳時代後期~中世

SR-1101 第1トレンチの北半で検出した、ほぼ南北方向の、蛇行する河跡である。幅は不明だが、深さは0.3mであった。遺物は、古墳時代後期の土器が出土している。

SK-1051・1052 第1トレンチで検出したほぼ方形の土坑で、両者とも約1.9m四方、深さは 1.0mである。遺物は僅少であったが、中世の遺構と判断される。堆積土にブロック土が含まれない ことから、粘土採掘坑の可能性は低いと考えられる。

b. 第2トレンチ

古墳時代前期~中期

SD-2101 第2トレンチの南端付近で検出した、西北西 - 東南東方向の溝で、幅1.2m、深さ 0.6mである。下層に地山のブロックを含む灰色粘土が堆積していることから、人為的に埋め戻され た溝と考えられる。遺物は、布留 2 式~古墳時代中期の土師器が出土している。

SK-2101 第2トレンチの中央部で検出した土坑で、南北軸は2.7m、深さ0.5mである。東半は調査区外となる。出土土器から、布留式期の遺構と考えられる。

SK-2102 第2トレンチ中央部で検出した土坑で、南北軸は1.5mである。東半は調査区外である。出土遺物は僅少であったが、布留式期の遺構と考えられる。

古墳時代後期

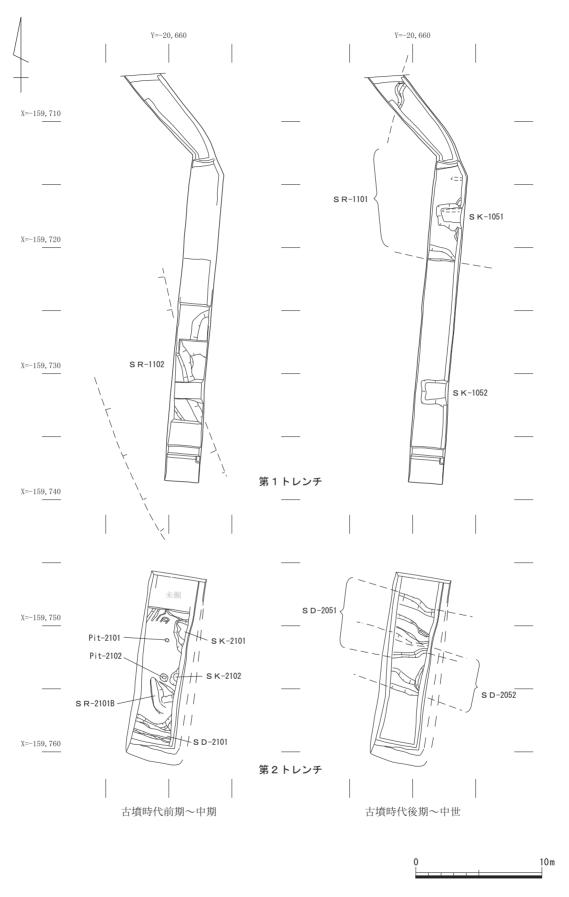
SR-2101・2101 B 第2トレンチの全体で検出された河跡で、SR-2101 Bは下層の凹みの可能性も考えられる。両岸とも検出していないため、幅は不明である。古墳時代前期~後期の土器が出土している。

古代~中世

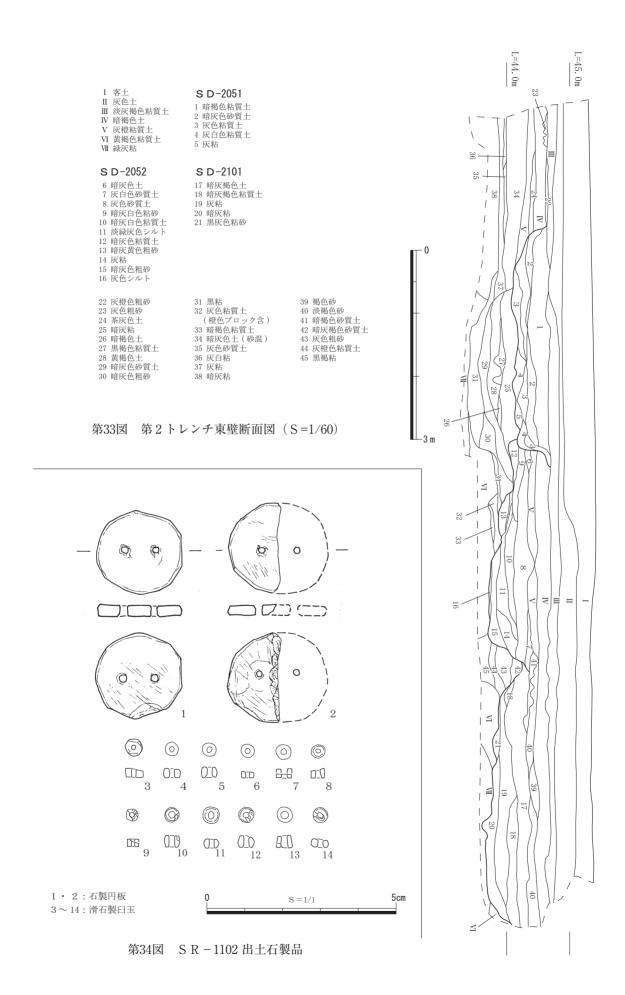
SD-2051 第2トレンチの中央やや北寄りで検出した、幅5m、深さ0.5mの西北西-東南東方向の大溝である。SD-2052の北肩を切る。遺物は、下層遺構からの混在と考えられる古墳時代前期~中期の土師器が少量出土したのみであるが、中世より下層の遺構面に掘削されているため、古代の遺構と推測できる。また、写真9-3のように、保津・阪手道の名残とされる道路と軸が沿うことから、保津・阪手道の北側側溝と考えられる。

SD-2052 第 2 トレンチの中央で検出した大溝で、方向・規模は SD-2051 とほぼ同じである。 SD-2051に北肩を壊されていることから、 SD-2052は保津・阪手道の最初期の側溝で、何らかの理由で埋没した後、 SD-2051が掘削されたと考えられる。既往の調査成果では、羽子田遺跡第16次調査などで検出された保津・阪手道の側溝も再掘削されていることが明らかになっており、この所見にも合致する。

I. 田原本町の埋蔵文化財



第32図 調査区平面図 (S=1/300)



3. まとめ

宮古北遺跡第20次調査では、古墳時代前期の集落遺構は検出されなかった。よって、十六面・薬 王寺遺跡第30次調査地付近が古墳時代前期末集落の北限と考えられる。しかし、SR-1102から石 製品が出土していることからも、生活範囲から大きく逸脱するような地点ではなかったと推定でき る。

第2トレンチで検出したSD-2051・2052は、保津・阪手道の北側側溝としては、本町で最も西 の検出例となる。保津・阪手道は、第20次調査地からさらに西に伸び、現在の大字富本を通過して いくと想定されているが、その先はどのように続くのか明らかになっていない。今後の調査で保津 ·阪手道がどのように続くのか明らかにしていく必要がある。



写真9-1 第1トレンチ 中世遺構完掘状況 (東から) 写真9-2 第1トレンチ SR-1102 完掘状況 (南東から)





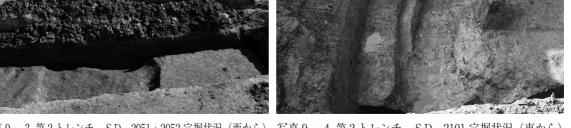


写真9-3 第2トレンチ SD-2051・2052 完掘状況(西から) 写真9-4 第2トレンチ SD-2101 完掘状況(東から)

8. 寺内町遺跡 第16次調査

1. 遺跡・既調査の概要

寺内町遺跡は、奈良盆地の中央、標高49m前後の沖積地に立地する。豊臣秀吉から田原本の地を 与えられた平野権平長泰は、自身は領地入りせずに浄土真宗教行寺に寺内町を築かせることで領地 の振興を図った。しかし、2代長勝が領地の直接経営に乗り出した際に支配権を巡って教行寺と対 立し、教行寺は箸尾に退転することとなった。教行寺の跡地には浄土真宗浄照寺と平野氏の菩提寺 となった本誓寺が置かれた。教行寺の建設した寺内町は北東部に築かれた陣屋の陣屋町として引き 継がれ、地域の商工業の中心地として栄えることとなった。

寺内町の南東部には、明治維新時の廃仏毀釈で廃寺となった医王寺があった。この敷地は明治33 年(1900)に田原本高等小学校が校舎を新築して移転、昭和7年(1932)に尋常小学校に高等科が併 設されたことで廃校となり、校舎は田原本女子技芸学校へ引き継がれた。この学校は田原本高等女 学校へと改称されたが、昭和23年(1948)に磯城農業高等学校と統合されるなどして廃校となり、 新制中学校へ校舎などが引き継がれた。田原本高等女学校時代の校舎は戦後解体され、新たに体育 館施設(第一体育館)が建てられて田原本中学校の生徒などが利用していたが、老朽化が進んだこ ともあり、現在は廃止施設となっている。

今回、第一体育館の敷地に隣接する町道が狭小であるため、体育館敷地の一部を道路用地として 拡幅工事がおこなわれることとなった。側溝部分の掘削が深いことから、敷地東側の南北方向の工 区を発掘調査で対応した。なお、敷地南側の東西方向の工区については大正年間に埋め立てられた 濠内での工事となり、掘削範囲が大正年間の埋め戻し土内であることから工事立会での対応となっ た。また、防火水槽解体工事も並行しておこなわれたが、この部分については近世大溝の断面が確 認できたため、工事立会時に断面図の作成をおこなった(第38図)。

2. 調査の成果

(1)層序

調査地の現状は体育館に附随するアスファルト敷きの駐車場である。調査では、南北45m、幅 1 mの調査区を設定した。ここでは、調査区北部での基本層序を示す。

第13次 4 第9次 第16次 第3次 寺内町遺跡工事立会調査 100m

I:アスファルト [検出標高50.8m、以下数値のみ記す]、Ⅱ:茶灰色砂礫土 [50.75m]、Ⅲ:暗褐

第35図 調査地位置図 (S=1/2,500)

色粗砂〔50.45m〕、Ⅳ:暗青灰色粘質土〔50.3m〕、V:暗茶灰色土〔50.1m〕、Ⅵ:暗茶灰色粘質土〔49.9m〕、Ⅷ:褐灰色粘質土〔49.7m〕、Ⅷ:橙灰色粘土〔49.5m〕、Ⅸ:暗灰色粘土〔49.4m〕、Ⅹ: 淡橙灰色粘土〔49.3m〕

第Ⅲ層が近代頃の整地層、第Ⅳ・V層が近世頃の造成土、第Ⅵ層が中世頃の遺物包含層、第Ⅲ層以下が地山とみられる。アスファルト下で煉瓦敷遺構を検出したほか、第Ⅲ層上面から掘削される形で戦前の可能性があるコンクリート建物基礎を確認した。また、第Ⅳ層上面で近世頃の遺構を、第Ⅵ層上面で鎌倉時代頃の遺構を、第Ⅲ層上面で平安時代後期頃の遺構をそれぞれ確認した。

(2) 遺構と遺物

平安時代

小溝群 調査区全体で東西方向の小溝を11条、南北方向の小溝を1条検出した。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測る。耕作に伴う遺構と考えられる。鎌倉時代の遺構SD-51などに切られること、若干の平安時代後期頃の土器片が出土していることから、平安時代の遺構と考えられる。なお、同時期の同様な遺構は50m離れた第8次調査でも確認しているが、南北方向が主であった。

Pit-67 調査区南端で検出した小規模な土坑である。南北0.6m、深さ0.2mを測る。柱穴の可能性がある。平安時代後期頃の土師皿が出土している。

SK-52 調査区南半で検出した土坑である。南北0.6m、深さ0.15mを測る。調査区西側に拡がるため正確な規模は明らかでない。11世紀~12世紀前半頃の瓦器埦等が出土した。

SK-53 調査区南半、SK-52の東側で検出した土坑である。南北1.2m、深さ0.2mを測る。調査区東側に拡がるため性格な規模は明らかでない。12世紀後半頃の瓦器等が出土した。このほか、調査区全体で小規模な土坑を多数検出した。12世紀頃の遺物を伴うが、遺構の性格は明らかでない。

鎌倉時代

SD-51 調査区北側で検出した西北西 - 東南東方向の大溝である。幅3.5m、深さ0.6mを測る。 13世紀前半頃の瓦器城・土師皿・白磁碗等が出土した。

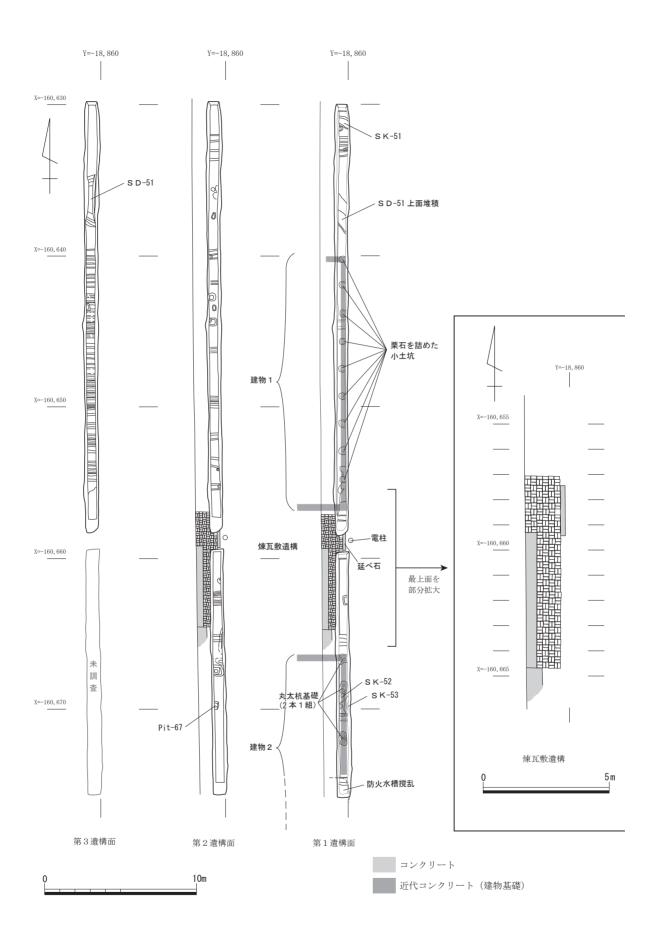
近世

SK-51 調査区北端で検出した土坑状の遺構である。主軸が北西 - 南東方向の楕円形とみられるが両端は調査区外に拡がる。短軸は0.6m、深さ0.1mを測る。近世陶磁器等の遺物が出土していることから、江戸時代後期の遺構とみられる。

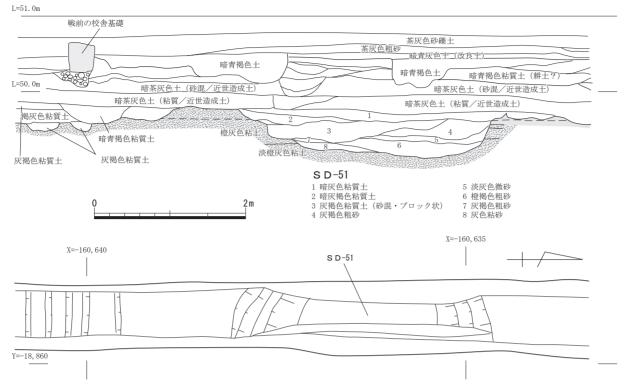
近代

建物1 調査区北半から中央にかけて、直径0.4m前後の土坑に礫が充填された基礎構造物を10基確認した。1.8m間隔で南北16.5mの範囲に分布する。この基礎構造物の上にコンクリート布基礎が載っていた。昭和23年の米軍による航空写真では、東西方向に長い切妻屋根の建物が確認できる。本遺構はこの建物の基礎に相当する可能性が高い。

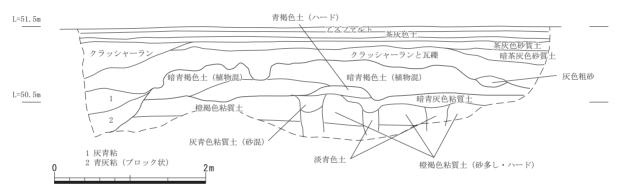
建物2 後述する煉瓦敷遺構の南側で建物基礎構造物を3基確認した。直径15cm前後の杭2本を打ち込んで基礎の根固めとしたものである。杭の周囲が青灰色化しており当初は柱穴と認識して掘削をおこなっているが、杭の影響により還元したものを誤認したと考えられる。3基の基礎構造物は2m・3mの間隔で設置されていたが、調査区南端が防火水槽設置工事時に攪乱を受けているため、さらに南に拡がる遺構であった可能性がある。先述の航空写真では、南北方向に長軸をもつ建物が



第36図 遺構平面図(第 $1 \sim 3$ 遺構面:S = 1/250、煉瓦敷遺構:S = 1/150)



第37図 SD-51 平面図および西壁断面図 (S=1/50)



第38図 寺内町工事立会調査 西壁断面図 (S=1/50)

敷地南東端で確認できる。

煉瓦敷遺構 アスファルトの直下で確認した煉瓦敷遺構である。建物1の南側に接する南北7.6m、幅1.4m以上の範囲が煉瓦敷となっていた。このうち南側5.4m分は幅0.9mの南北方向通路状になる。昭和23年に廃校となった田原本高等女学校の校舎とそれに伴う煉瓦敷遺構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、平安時代・中世・近世・近代の各時期の遺構を確認することができた。

平安時代後期~鎌倉時代の遺構としては、平安時代末前後の小規模な土坑群、鎌倉時代頃の大溝 1条などを検出した。付近で実施した寺内町遺跡第8次調査でも鎌倉時代~室町時代頃の屋敷地関 連遺構を確認していることから、楽田寺門前町が本調査地付近にも拡がっていたと考えられる。な お、本調査区の南側で実施した第3次調査や南西隣接地の第2次調査では、中世の顕著な遺構・遺物 の拡がりを確認していないことから、本調査地付近が中世集落の南限となる可能性が高い。また、

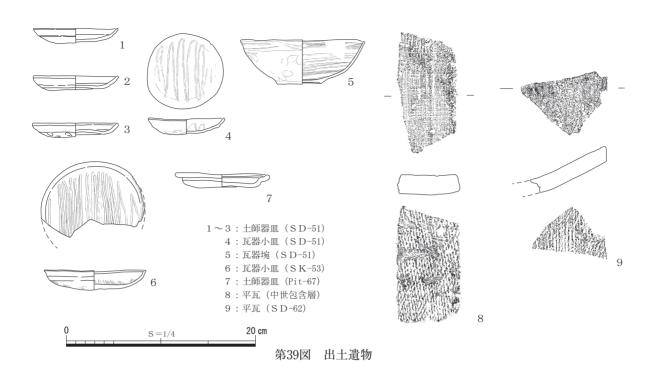




写真10-1 煉瓦敷遺構検出状況 (南から)



写真10-2 第3遺構面完掘状況(北から)



写真10-3 第2遺構面Pit 完掘状況(南東から)



写真10-4 第2遺構面完掘状況(南から)



写真11-1 工事立会の西壁断面(東から)



写真11-2 「絵図之添 (俵本村小字南新地)」 (左が北、□が調査区推定位置)

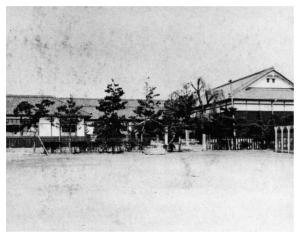


写真11-3 田原本高等実科女学校 遠景



写真11-4 田原本高等実科女学校 近景

包含層出土遺物も含め、14~17世紀に属する遺物は殆ど確認できていないことから、本調査区付近では平安時代後期から鎌倉時代にかけて集落域となっていたが、室町時代には田地化していた可能性も考えられる。

今回の調査では、江戸時代と特定できる遺構は僅少であった。近世の学校関連施設による攪乱の影響が大きかったものと考えられる。ただし、本調査の対象となった事業と一連で既存防火水槽撤去工事があり、この工事立会では大正年間に埋められたと伝えられる東西方向の濠を確認することができた。寛政七年三月付の「絵図之添〔俵本村小字南新地〕」には今回の調査地付近の様子が詳細に描かれており、調査地付近は医王寺という寺院の境内地であったこと、敷地南端には幅2間半(約4.5m)の濠があったことを知ることができる。工事立会で確認した濠はこの絵図に描かれたもので、地元には大正年間にこの濠が埋め立てられたという話が伝わる。

近代の遺構としては、学校関連の建物跡 2 棟、煉瓦敷遺構を確認した。昭和23年(1948)に廃校となった田原本高等女学校関連の遺構と考えられる。米軍撮影の航空写真では、東西に長い教室棟とみられる校舎 2 棟が敷地北半に南北にならび、敷地南東隅には講堂のような長方形の建物がみられる。当時の校舎は切妻状の木造瓦葺き平屋建だったようであるが、この建物の基礎部分と建物間の煉瓦敷部分を検出したのであろう。近代の本町の教育史を考える上で貴重な資料が得られたことになる。

9. 多地区古墳推定地隣接地の発掘調査

1. 遺跡の概要

調査地は、田原本町の南端付近に位置する。近隣には弥生時代~平安時代の遺物散布地である多東新池遺跡のほか、西には多遺跡が所在する。平成27年度は、大字多の東部で下水道工事が実施されたことに伴い、人孔が設置される 5 ヶ所について発掘調査を実施した。特に、第 2 トレンチの北北西に古墳 1 基(11 - C - 0109)、第 4 トレンチの東側に古墳 1 基(11 - C - 0102)が遺跡地図に登録されており、それらに関する遺構や遺物の検出が想定された。

2. 調査の成果

(1) 層序

ここでは、第4トレンチの層序を代表させて記述する。

I:アスファルト [検出標高54.6m、以下数値のみ記す]、II:クラッシャーラン [54.58m]、II: 青灰色砂質土 [54.5m]、IV:黄灰褐色土 [54.4m]、V:橙色粗砂 [54.3m]、VI:淡青灰色粗砂 [53.7m]、VI:暗青灰粘 [53.6m]、WI: 灰褐色砂質土 [53.2m]、IX:暗褐色土 [53.0m]

第Ⅰ~Ⅵ層は、宅地造成時および道路工事時の盛り土とみられる。遺物は出土していない。第Ⅳ 層上面で素掘小溝を検出している。

(2) 遺構と遺物

素掘小溝群 第3トレンチで東西方向の、第4・5トレンチで南北方向の素掘小溝を検出した。 これらの遺構は中世のものと考えられる。

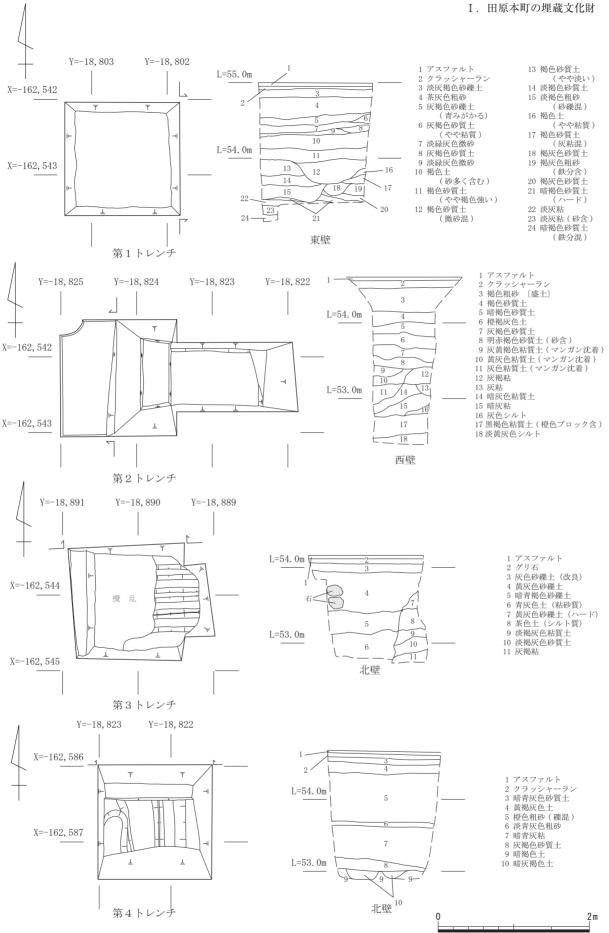
遺物は、須恵器片が数片出土しているものの、古墳の手掛かりとなる遺構・遺物は検出されなかった。

3. まとめ

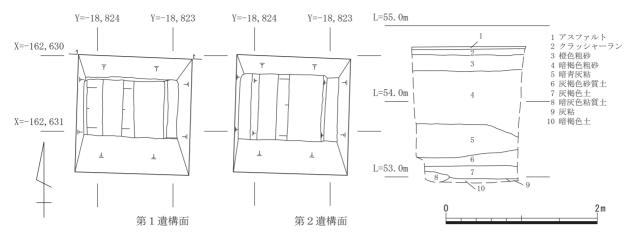
調査の結果、古墳の手掛かりは検出されなかった。しかし、素掘小溝の方向から、中世の地割を 推定することができる。特に、第3トレンチ付近では、現状の地割が南北方向だが、中世では異なっ ていた可能性が高く、大字多周辺の地割を考察する重要な成果といえる。



第40図 調査地位置図 (S=1/2,500)



第41図 第1~4トレンチ 遺構平面図および断面図 (S=1/50)



第42図 第5トレンチ 遺構平面図および北壁断面図 (S=1/50)



写真12-1 調査前全景(東から)



写真12-2 第3トレンチ完掘状況 (西から)



写真12-3 第4トレンチ完掘状況(南から)



写真12-4 第4トレンチ完掘状況(南から)

10. 三笠遺跡 第1次調査

1. 遺跡の概要

三笠遺跡は、奈良盆地の中央、標高50m前後の沖積地に立地する。三笠集落の西側に所在する農業用溜池「三笠池」の周辺が「周知の埋蔵文化財包蔵地」となっているが、遺跡内容は不明で、今回個人住宅の建築がおこなわれるのに伴い、初めて遺跡名「三笠遺跡」が付与されることとなった。なお、江戸時代まで「下庄村」と呼ばれていた集落が、明治時代に名称を変更して「三笠村」と呼ばれるようになった。村の中心には春日神社と浄教寺があり、浄教寺の本堂に載る鬼瓦は「鎚屋伝兵衛」の銘をもつ。新ノ口村の瓦師鎚屋伝兵衛の手による鬼瓦は旧十市郡域に点在するが、本品もそのうちの1つということになる。

今回、遺跡南東部で個人住宅が建築されるのに伴い、建物北側に東西3.5m、南北2mの調査区を 設定して調査をおこなった。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は宅地である。

I:暗茶灰色砂礫土〔検出標高50.7m、以下数値のみ記す〕、II:茶灰色土〔50.4m〕、II:茶灰色土 (黒灰粘ブロック混)〔50.1m〕、IV:暗青灰色粘質土〔50.0m〕、V:橙褐色土 (ハード)〔49.7m〕、VI:灰色粘質土 (砂混)〔49.55m〕、VII: 暗灰褐色土 (砂混)〔49.35m〕、VII: 橙褐色粘質土〔49.2m〕 第 I ~ III 層が現代造成土、第 IV 層は旧水田耕土、第 VI 層は中世遺物包含層、第 III 層は地山とみられる。中世の遺構は第 VI 層までを重機で除去して確認した。

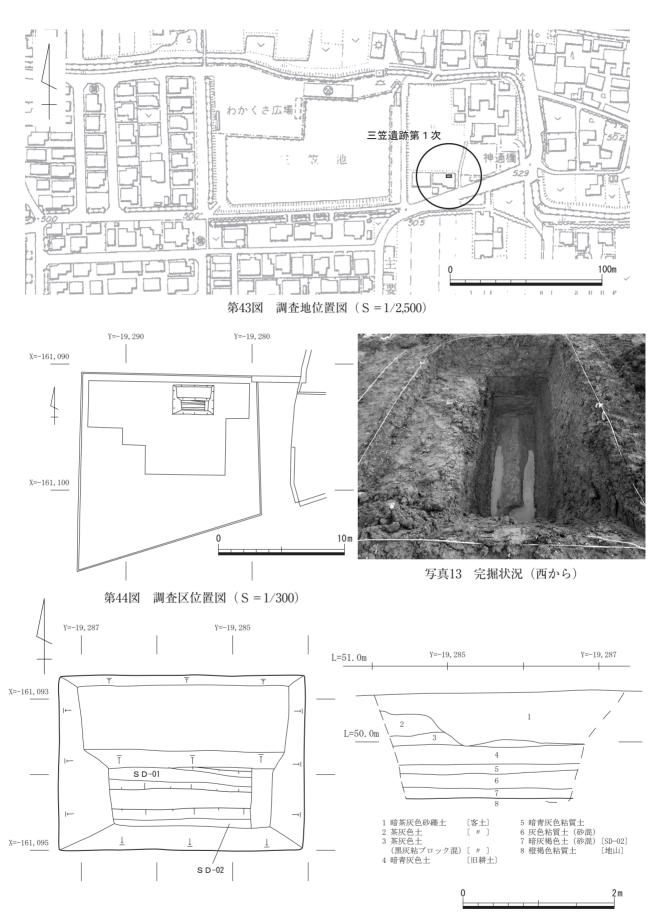
(2)遺構と遺物

中世

 $SD-01\cdot02$ 東西方向の小溝 2 条を検出した。幅0.1m、深さ0.15m前後を測る。遺構に伴う遺物は皆無であるが、遺構検出時に SD-01の上面から白磁片 1 点、中世とみられる瓦片 1 点が出土している。遺物が僅少であるため時期は不明。

3. まとめ

今回の調査では、中世の耕作に伴う小溝以外は顕著な遺構を確認することができなかった。ただし、遺物に中世頃の瓦片が含まれることから、付近に寺院などが存在した可能性が考えられる。なお、本遺跡の南側500mに創建が古代に遡る寺院「秦楽寺」があるが、本遺跡との関係は明らかでない。今後の周辺の調査により秦楽寺周辺地の状況も含めて解明していく必要がある。



第45図 調査区平面図および南壁断面図 (S=1/50)

11. 阪手北遺跡 第7次調査

1. 遺跡・既調査の概要

阪手北遺跡は、標高約50mの沖積地に位置する。道路工事に伴って実施された第3次調査では、 奈良時代~鎌倉時代の遺構・遺物が検出されており、墨書土器や石製鍔帯が出土していることから、 官衙にかかわる遺跡と考えられている。

今回の調査は、第3次調査の北側で宅地造成が計画されたことに伴って実施した。

2. 調査の成果

(1) 層序

I:暗茶灰色土〔検出標高49.65m、以下数値のみ記す〕、II:暗灰青粘〔49.6m〕、II:淡緑灰色粘質土〔49.4m〕、IV:淡灰褐色粘質土〔49.4m〕、V-a:暗灰褐色粘質土〔49.2m〕、V-b:暗灰褐色粘砂〔49.06m〕、VI:暗灰色砂質土〔48.9m〕、VI:淡黄灰色シルト〔48.75m〕、VII:黒灰粘〔48.6m〕第 I 層は水田耕土層、第 II 層は水田床土層である。第 VI 層以下は地山となる。素掘小溝の検出は第 V-b 層上面で、河跡の検出は第 VI 層上面でおこなった。

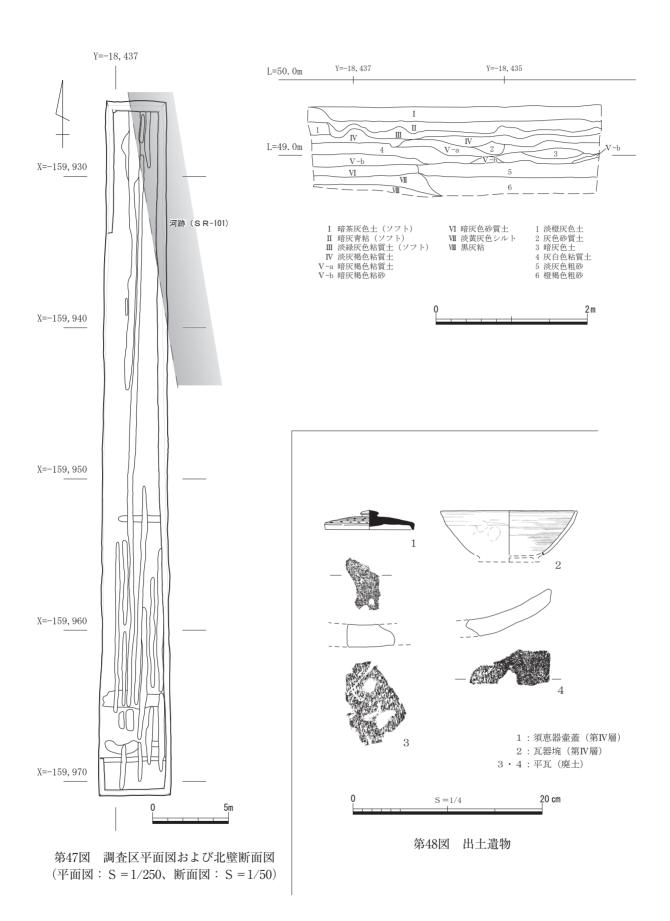
(2) 遺構と遺物

調査区全体で南北方向の素掘小溝群を検出したほか、調査区の北東側では古代のものと推定される河跡 (SR-101)を検出した。しかし、本調査地ではこれ以外に古代の遺構は検出されておらず、阪手北遺跡内の古代遺構は、本調査地よりも南側に分布することが判明した。

出土遺物は、第48図に示した。第IV層から須恵器壷蓋 (1)、瓦器埦 (2)、廃土から平瓦 (3・4) が出土した。



第46図 調査地位置図 (S=1/2,500)



3. まとめ

調査の結果、本調査地は、中世は耕作地であったことが判明した。ただし、遺物は少なく、詳細な時期は確定できない。また、古代の遺構は、河跡がその可能性があるのみで、また遺物も僅少であったことから、阪手北遺跡における古代遺構の北限は、第3次調査第1トレンチ付近と推定できる。



写真14-1 遺構検出状況全景(南から)



写真14-2 調査区北壁断面(南から)

12. 唐古・鍵遺跡 試掘調査 (S-201501)

1. 調査の概要

史跡整備工事に伴う下水道人孔設置工事について、遺構への影響を確認するために事前の試掘調査を実施することとなった。掘削範囲は、東西2m、南北1.8m、深さ2.1m。

2. 調査の成果

山砂が厚さ1m、暗茶灰色土の造成土が厚さ0.55m、旧水田耕土・床土層が0.45m。以下に中世遺物包含層の可能性がある暗褐色土が拡がる。掘削範囲内では弥生時代の遺物包含層まで達しないことを確認した。

3. まとめ

調査の結果、工事による掘削は弥生時代の遺物包含層までおよばないことを確認した。ただし、 狭小な面積で上層の山砂が崩落しやすい状態であったため、簡単な層序確認程度しかできなかった。 なお、施工時の立会でも弥生時代遺物包含層まで掘削がおよばないことを確認した。



第49図 調査地位置図 (S=1/5,000)



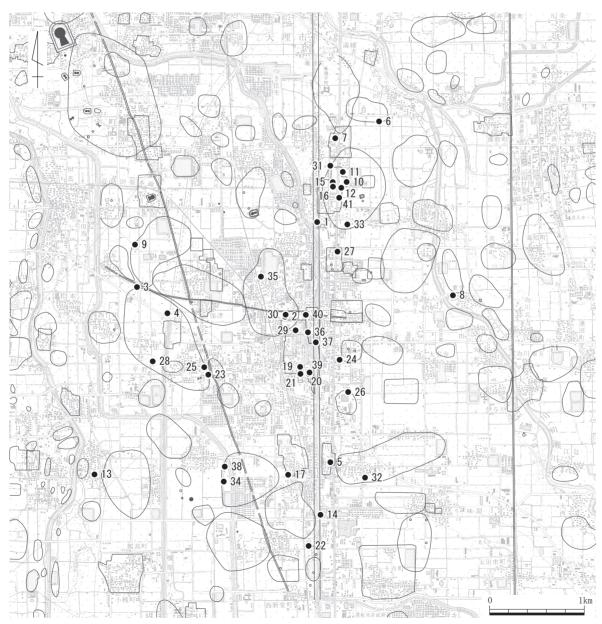
写真15 北壁断面(南から)

(2) 工事立会の概要

2015年度に実施した工事立会は41件である(第7表)。史跡整備事業に伴う唐古・鍵遺跡の工事立会が1件、公共上下水道工事に伴う工事立会が4件、その他公共事業に伴う工事立会が11件、個人住宅建築等に関わる工事立会が11件、民間開発に伴う工事立会が14件である。

対象となった遺跡は、唐古・鍵遺跡が多く、次いで十六面・薬王寺遺跡、寺内町遺跡、平野氏陣屋跡と続く。唐古・鍵遺跡は史跡公園の整備や史跡の維持管理等の公共事業による比率が高い。対して十六面・薬王寺遺跡、寺内町遺跡、平野氏陣屋跡は個人住宅の建築によるものが多くなる。

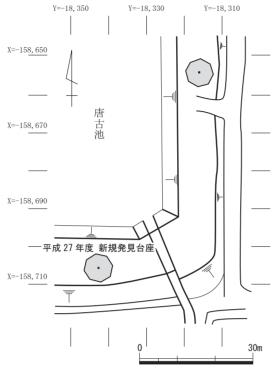
また、遺物散布地としていた大字佐味での工事立会により、中世頃の溝を確認した。昨年度から継続しておこなっている当該地域の工事立会の成果(後述)から、「佐味垣内遺跡」として新規登録をおこなった。



第50図 田原本町の遺跡と工事立会地点(S=1/40,000)

第7表 2015年度 工事立会一覧

	遺 跡 名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内容
1	下ツ道	田原本町大字鍵小字縄掛	個人	個人住宅の建築	清水	2015. 4. 7	柱状改良時に立会。湿式の為状況不明。遺
2	(R-201501) 羽子田 (R-201502)	107番1 田原本町小字織田垣内 379番10	㈱竹村工務店	分譲住宅の建築	清水	2015. 4. 9	構・遺物不明。 柱状改良時に立会。湿式の為状况不明。瓦 器境1点が出土。遺構不明。
3	十六面・薬王寺 (R-201503)	田原本町大字十六面 小字下乾田96番1 北側河川	田原本町 (建設課)	橋梁工事	清水	2015. 4.22	橋脚部分開削時に立会。大半が過去の河川
4	十六面・薬王寺 (R-201504)	田原本町大字保津 小字満所292番1	個人	診療所および薬局の 建築	清水	2015. 4.24	平成26年度の立会の続き。布基礎掘削時に 立会。掘削は造成土上から-1.25mまでで旧 耕土層の上位までに留まる。遺構・遺物不 明。
5	日光寺推定地 (R-201505)	田原本町大字千代 小字今堂1119番2外	個人	コンビニエンス ストアの新築工事	清水	2015. 5. 8	ベタ基礎および排水関係の掘削時に立会。 最大でGL-0.5mの掘削であり、造成土内に 留まる。遺構・遺物不明。
6	八田 (R-201506)	田原本町大字八田 小字マグロ82番1	(㈱サトウ プロダクト	青空駐車場の造成	清水	2015. 5.27	擁壁基礎掘削時に立会。GL-0.3m前後の掘 削で、水田耕土・床土内に留まる。遺構・ 遺物不明。
7	唐古氏居館跡推定地 (R-201507)	田原本町大字唐古 小字垣内337番10	㈱中和商事	解体工事	柴田	2015. 6.17	建物解体時に立会。最大でGL-3.0m程度の 掘削があったが、撹乱部にあたっていた。 基本的な掘削は盛土内に留まる。遺構・遺 物不明。
8	東井上 (R-201508)	田原本町大字東井上 小字サイゴ149番1 北側道路外	田原本町 (下水道課)	下水道工事	清水柴田	2015. 6.23 • 11. 4	試掘時に立会。GL-1.5mの掘削。GL-0.7~1.0m程は過去の埋管時の撹乱、その下層は水成堆積とみられる灰青色粘質土。11月は水孔和削時に立会。GL-1.3m前後の掘削。GL-0.5m以下に中世以降の造成土が拡がるが、遺物なし。
9	宮古北 (R-201509)	田原本町大字黒田 小字馬場113番1・114番1	個人	青空駐車場の造成	西岡	2015. 6.30	造成工事時に立会。現水田面から0.5~0.6 m程度の盛土をおこなう。掘削を伴わず、 地下遺構への影響はなし。
10	唐古・鍵 (R-201510)	田原本町大字唐古 小字ソ子田121番1	田原本町 (総合政策課)	コスモスの栽培	清水		造成土内での起耕作業。地下遺構への影響なし。
11	唐古・鍵 (R-201511)	田原本町大字唐古 小字ソ子田99番	田原本町 (総合政策課)	史跡維持管理	清水	2015. 7.15	史跡公園造成工事に伴い畑の排水路に土が 入り込み、水路復旧をおこなうため立会。 既存排水路の付け直しのみであり、掘削は 地下遺構までおよばない。
12	唐古・鍵 (R-201512)	田原本町大字唐古 小字上塚110番外	田原本町 (総合政策課)	史跡公園整備ほか	清水柴田	2015. 7.22 ~2016. 1.22	史跡地南西部の水路敷設工事時および唐古池南・西側の堤防除栽工事時、国道東の下水道人抗設置工事に立会、水路工事市は最大でGL-0、3~0、8m程度の掘削、双方共に表土層までの掘削であり、地下遺構への影響なし。後日の巨樹の抜根作業時の立会では、GL-0、8m程度まで根が拡がっており、弥生土器片が出土したが、弥生中代遺構作業の強制であり、たこれら除機作業の結果、唐古池、また、これら除機作業の発見(次ページ図・写真)。池西側堤防での抜根作業では、GL-0、6m程度の掘削で、ほぼ表層に留まる。遺構・遺物不明。
13	遺物散布地 (佐味垣内) (R-201513)	田原本町大字佐味 小字アゾマヤ488番 北側道路	田原本町 (下水道課)	下水道工事	清水	2015. 7.21 ~2016. 1.22	人孔掘削時に立会。GL-1.1mで近世溝を検出。隣接する水路の肩とみられ、近世頃の水路を縮小して現在の道路となったことが判明。また、一部ではG-1.0~1.4mに河川堆積がみられた。別途報告あり。
14	下ツ道 (R-201514)	田原本町大字千代 小字下田25番6	個人	個人住宅の建築	清水	2015. 7.31	着手後に連絡があり、立会時には基礎がほぼ完成していた。届ではベタ基礎工事であり、掘削は地下遺構におよばない。
15	唐古・鍵 唐古南氏居館跡 推定地 (R-201515)	田原本町大字唐古 小字サツマ43番1外	(株)I・T・O	青空資材置場の造成	清水柴田	2015. 8.21 • 24	盛土のすき取り工事時に立会。過去の造成 土の上面0.5m前後のすき取りであり、旧水 田面以下まで掘削はおよばない。
16	唐古・鍵 唐古南氏居館跡 推定地 (R-201516)	田原本町大字鍵小字垣内 311番1	個人	宅地分譲および 下水管埋設	清水 柴田 西岡	2015. 10. 15 ~11. 11	上下水道管理設および敷地擁壁工事時に立会。唐古・鍵遺跡第116次発掘調査地と重複する。GL-0、4mで中世遺物包含層、GL-0、5mで弥生時代後期遺構埋土。第116次調査区外から弥生時代前期~後期後半の土器・木製品等が出土。擁壁工事は遺構面まで掘削がおよばない。
17	秦楽寺 (R-201517)	田原本町大字秦庄 小字南垣内 300番1・300番2	個人	障がい福祉サービス 施設の建築	清水	2015. 10. 26	ボーリング調査時およびベタ基礎工事時に 立会。遺構・遺物なし。
18	寺内町 (R-201518)	田原本町小字大門町 60番1外	個人	擁壁改修・個人住宅 の建築	清水柴田		擁壁改修工事を確認したため立会。立会時 点で擁壁工事はほぼ完了。GL-1.0m程の拥 削で、下半は近世包含層とみられる。残土 から近世後期の胸磁器類が出土。のちに柱 状改良工事時に再度立会。湿式の為状況不 明。遺構・遺物不明。
19	平田 (R-201519)	田原本町大字平田 小字大垣内272番1外	㈱ゆかりの里苑	福祉施設の建設	清水	2015. 11. 5	表層改良工事時に立会。2.0m以上の造成土 上から1.0m程度の掘削。地下遺構への影響 なし。



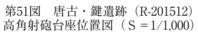




写真16-1 高角射砲台座



写真16-2 台座中央の旋回痕

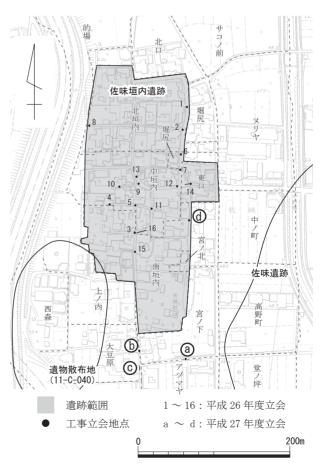
	遺 跡 名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内 容
20	寺内町 (R-201520)	田原本町小字丸木橋36番5	田原本町 (建設課)	道路工事 (既存防火 水槽の撤去)	清水柴田	2015. 11. 6 • 12. 14	防火水槽の撤去工事時および道路擁壁・水 路工事時に立会。最大でGL-3.0mの掘削。 廃土から瓦質火鉢・土師器皿等が出土。近 代大溝とみられる遺構を検出。
21	寺内町 (R-201521)	田原本町小字大門町 35番11	個人	自動車車庫の建築	柴田	2015.11. 9	布基礎工事時に立会。GL-0.45mまでの掘削であり、遺構・遺物なし。掘削断面から北側水路の南肩とみられる落ちを確認。
22	多地区古墳推定地 (R-201522)	田原本町大字多 小字南八反田345番 北側道路外・356番 ・352番1	田原本町 (下水道課)	下水道工事	清水柴田	2015. 11. 17 ~12. 5	人孔埋設の試掘時および人孔設置時に立会。 設計深度はGL-2.0mをこえるが、GL-1.2~- 1.4mで地山に到達した。遺構・遺物なし。
23	十六面・薬王寺 (R-201523)	田原本町大字薬王寺 小字大75番5	個人	個人住宅の建築	清水柴田	2015. 11. 20 • 2016. 1. 12	據壁工事時に立会。最大でGL-0.5mの掘削。 小溝を確認するが遺物なし。後日の柱状改 良工事時に再度立会。遺構・遺物不明。
24	阪手仁王前 (R-201524)	田原本町大字阪手 小字根ヵ坪663番1 東側水路	田原本町 (建設課)	現場打水路	清水柴田	2015. 11. 24	既存護岸石組みと煉瓦積み水門の撤去工事時に立会。掘削は基本的に水路埋め戻し土 内に留まる。煉瓦積み水門は近代の古いも のであった可能性があるが、昭和以降に積 み替えられコンクリートで補強されていた とみられる。遺構・遺物なし。
25	十六面・薬王寺 (R-201525)	田原本町大字薬王寺 小字東口68番2・68番6	個人	個人住宅の建築	西岡	2015. 11. 30	柱状改良工事時に立会。遺構・遺物不明。
26	阪手 (R-201526)	田原本町大字阪手 小字中ノ町630番65	個人	個人住宅の建築	西岡	2015. 12. 7	擁壁工事時に立会。届出では約2.0mの盛土 上から-1.55mの掘削であったが、過去の改 良工事層があった為-1.0m程度の掘削。最 大でGL-1.3m程度であり、造成土内に留ま る。遺構・遺物なし。
27	小阪里中 (R-201527)	田原本町大字小阪 小字北浦84番1	㈱トランス ポーター	事務所の建設	柴田	2015. 12. 11	布基礎工事時に立会。掘削はGL-0.36mまで で、盛土内に留まる。遺構・遺物なし。
28	十六面・薬王寺 遺物散布地 (R-201528)	田原本町大字十六面 小字蔵持396番 西側水路外	田原本町 (建設課)	道路拡幅工事	清水	2015. 12. 14	着手を確認した為立会。コンクリート基礎が完成していた為、詳細な状況は不明。掘削はほぼ中世遺物包含層とみられる層位に留まるとみられるが、一部で古墳時代または地山とみられる深度まで掘削がおよんでいた。顕著な遺構・遺物はみられない。
29	寺内町 (R-201529)	田原本町小字田中345番	個人	個人住宅の建築	清水	2015. 12. 21	鋼管杭打設工事時に立会。遺構不明。近代 以降の陶磁器片多数。地下遺構への影響は 最小限とみられる。
30	羽子田 (R-201530)	田原本町小字織田垣内 379番9	個人	個人住宅の建築	清水	2015. 12. 21	基礎工事着手後の立会。ベタ基礎が完成しており、遺構・遺物不明。地下への影響は少ないとみられる。
31	唐古・鍵 (R-201531)	田原本町大字唐古 小字東平田71番1・72番1外	田原本町 (まちづくり推進室)	交流促進施設の建設	清水	2016. 1.12	表層の寸き取り工事時に立会。GL-0.2m程度の掘削であり、地下遺構への影響は不明。 遺物なし。

	遺 跡 名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内 容
33	唐古・鍵 (R-201533)	田原本町大字鍵小字 北登戸田137番1	㈱ディーズ コーポレーション	青空駐車場の造成	西岡	2016. 1.15	擁壁立ち上げ工事を確認した為立会。擁壁 基礎は完了し、壁部の立ち上げ工事中で あったため、詳細な状況は不明。GL-0.3m 程の掘削であり、水田床土内までに留まる とみられる。
34	矢部南 (R-201534)	田原本町大字矢部 小字修理敷361番1 東側水路外	田原本町 (建設課)	水路工事	清水	2016. 1.27	水路掘削時に立会。水田面から-0.2~0.25 mの掘削で、既設水路の掘削による撹乱内 に留まるとみられる。遺構・遺物なし。
35	羽子田 (R-201535)	田原本町大字八尾 小字西池538番8	個人	個人住宅の建築	清水	2016. 2. 1	布基礎掘削工事時に立会。GL-0.3mの掘削 で、造成土内に留まる。遺構・遺物不明。
36	平野氏陣屋跡 (R-201536)	田原本町小字奥垣内 756番2	個人	個人住宅の建築	清水	2016. 2. 4	柱状改良工事時に立会。 φ0.44mの杭46本と、GL-0.3mの掘削。湿式の為状況不明。 遺構・遺物不明。
37	平野氏陣屋跡 下ツ道 (R-201537)	田原本町小字三輪町 465番1 東側道路	田原本町 (建設課)	道路拡幅工事	清水	2016. 2. 4	掘削工事を確認した為立会。GL-1.5m程の 掘削であるが、矢板が打たれていた為詳細 は不明。堤防盛土上からの掘削であり、地 下遺構への影響は少ないとみられる。
38	宮森 (R-201538)	田原本町大字矢部 小字梨ノ木560番2外 南側里道	田原本町 (建設課)	道路工事	清水		GL-0.4~0.7mの掘削。遺物包含層は確認できず。遺構・遺物なし。
39	平野氏陣屋跡 (R-201539)	田原本町小字奥垣内 756番8	パナホーム(株)	共同住宅の建設	清水	2016. 2.10 • 13	柱状改良工事時に立会。 φ0.4mの杭58本と、GL-0.3mの掘削。湿式の為状況不明。 遺構・遺物不明。
40	平野氏陣屋跡 (R-201540)	田原本町小字カジヤ垣内 889番3	大光建設㈱	分譲住宅の建築	西岡	2016. 3. 7	工事着手後に連絡があり立会。基礎工事は 完了し、建物部を建設中であった為、地下 の状況は不明。発掘届ではGI-0.44mまでの 掘削であり、盛土内に留まる設計であるこ とから、遺構面には達しないであろうとみ られる。
41	唐古・鍵 (R-201541)	田原本町大字鍵小字垣内 301番1 北側里道	個人	野井戸の陥没	柴田	2016. 3.15	大型車が里道を走行中、埋没していた野井 戸を踏み抜いた為、埋め戻しの際立会。立 会時点ですでに埋め戻しが完了していた。

R-201513 佐味垣内遺跡 工事立会

平成26年度から27年度にかけて、大字佐 味での下水道工事が実施された。周知の遺 跡外での工事ではあったが、平成26年度の 工事立会により中世遺構を確認した。平成 27年度の工事は遺跡範囲の南側が中心で、 遺跡の南限を確定することができた。立会 地点a~cは全体が粗砂堆積であり、河道 内と考えられる。なお、遺跡東部に位置す るdでは、南北方向の溝1条を確認した。 溝幅・深さともに不明であるが、堆積土か ら中世頃の遺構とみられる。

本年度までの工事立会の成果および小字 名から中世遺跡が存在しているとし、平成 28年4月20日に遺跡の異動届を奈良県教育 委員会に提出し、5月31日に「佐味垣内遺 跡」として新規登録した。



第52図 佐味垣内遺跡の範囲と工事立会地点 (S=1/5,000)